

# 外ガイド遺跡発掘調査報告書

— 山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査 —

1996. 3

山梨県教育委員会  
日本鉄道建設公団

# 外ガイド遺跡発掘調査報告書

1996. 3

## 例　　言

- 1 本書は日本鉄道建設公団から山梨県教育委員会が受託した山梨リニア実験線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は1991年10月2日から12月24日まで山梨県埋蔵文化財センターが大月市初狩町字外ガイド3493-1ほかので実施した。
- 3 発掘調査は山梨県埋蔵文化財センターの小野正文、早川典孝が担当し、保坂裕史、森原明廣が補助した。
- 4 本書の編集執筆は小野正文が担当し、火山灰の分析執筆は帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏に委託した。
- 5 外ガイド遺跡の遺物・原図はすべて山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 6 報告の遺構の記号は調査時にはSB：住居址、SP：土塹・柱元、SJ：石組炉、SH：配石、SX：不明とした。整理の階段で修正が必要とされたが、調査時の記号のままとした。

## 序

本報告書は、山梨リニア実験線建設に先立ち平成2年度に発掘調査いたしました山梨県大月市初狩地内の外ガイド遺跡について、その成果をまとめたものであります。

山梨リニア実験線は秋山村から境川村に至るほぼ直線の48.2キロの超電導磁気浮上方式による新しい高速輸送鉄道であります。このうち先行区間18.4キロの都留市朝日曾離から大月市笛子の間に、都留市九鬼第II遺跡、中溝遺跡、揚久保遺跡、中谷遺跡、大月市外ガイド遺跡の5遺跡があります。

外ガイド遺跡は大月市の高川山（976m）を頂点とする東西に走る山系の北麓斜面の小さな扇状地状地形の谷頭に近い部分にあります。昭和54年度の全国遺跡地図にその存在が知られていますが、今回発掘調査を実施しようとした部分は谷頭に近く、日照条件も厳しく、遺跡の存在が危ぶまれたところでもあります。

調査の結果からは奈良時代から平安時代の住居址、土坑の存在が確認されました。特に奈良時代の甕には当方の特色を色濃く残した「堀之原タイプ」と呼ばれる甕が主体を占めております。それが平安時代に至ると「甲斐型」と呼ばれる甕に席巻されてしまいます。奈良から平安時代に至る手工業の変化をこうした甕に見出すことができます。

また、縄文時代におきましては、屋外の石組み炉は早期の押型文土器の時代を中心にやや下った時期まで見られます。早期には未明の型式の土器があり、金色の雲母を多く含む点は、恐らく山梨県内を中心存在するのではないかと予想されます。後期の初めの時期には敷石住居址、竪穴住居址、掘立柱建物址、配石遺構などが見られます。この時期の掘立柱建物址の発見は県内では初めてであります。

今回得られた成果が奈良・平安時代の地域的展開ならびに縄文時代においては早期後半のはとんど漠然としていた土器群の解明にご利用いただければ幸甚であります。

また、発掘調査についてさまざまご協力を賜った関係機関、地元地区、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1996年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

## 挿図目次

- 第1図 外ガイド遺跡位置図  
第2図 周辺の遺跡  
第3図 山梨リニア実験線関係遺跡  
第4図 外ガイド遺跡全体図  
第5図 土層図  
第6図 SB001・SB003実測図  
第7図 SB004・SB003実測図  
第8図 SB006実測図  
第9図 墨書き器など（1／2）  
第10図 SB001出土遺物、確認面出土遺物  
第11図 SB003・SB004出土遺物  
第12図 SB006出土遺物（1／3）  
第13図 SB005、SP001～003、SP009～001  
第14図 SJ009・SX006  
第15図 SX008  
第16図 SX009  
第17図 SP008、SX010、SX009  
第18図 SH001、SH004、SX004、SX005、  
SX001、SJ001、SS003、SJ007  
第19図 SX006、SX007、SJ007、SJ008、SJ010  
～SJ013  
第20図 SJ014～SJ024、SX003  
第21図 出土土器拓影(1)  
第22図 出土土器拓影(2)  
第23図 出土土器拓影(3)  
第24図 出土土器拓影(4)  
第25図 出土土器拓影(5)  
第26図 出土土器実測図  
第27図 出土土器拓影(6)  
第28図 出土土器拓影(7)  
第29図 出土土器拓影(8)  
第30図 出土土器拓影(9)  
第31図 出土土器拓影(10)  
第32図 出土土器拓影(11)  
第33図 出土土器拓影(12)  
第34図 出土石器(1)  
第35図 出土石器(2)  
第37図 外ガイド遺跡資料のテフラ分析

## 表目次

- 表1 平安時代の土器観察表  
表2 繩文時代の石器観察表

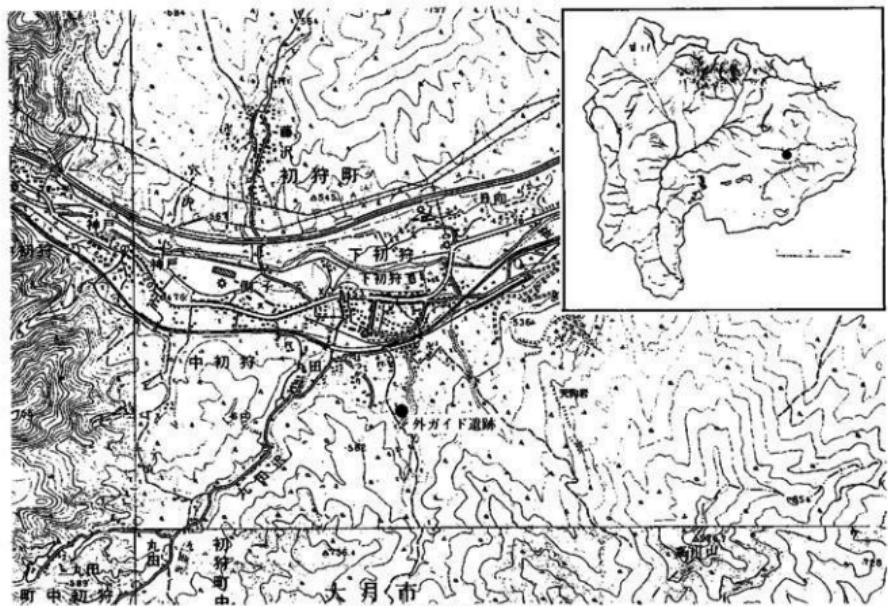
- 表3 外ガイド遺跡資料中の計数火山ガラス粒数  
表4 火山ガラス屈折率

## 図版目次

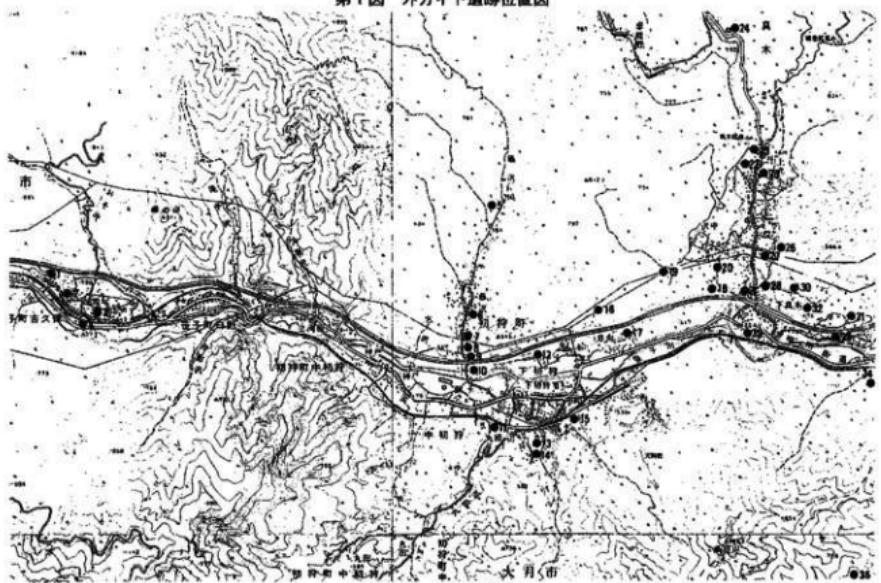
- 図版1 SB001、SB003、SB003・004、SB006、  
SP010、SP009、SP011  
図版2 SJ0001、SJ0006、SJ0007、SJ0008、SJ00  
09、SJ0010  
図版3 SJ0013、SJ0014、SJ0016、SJ0017、SJ00  
18  
図版4 SJ0019、SJ0020、SJ0019、020、SJ0021、  
SJ0022、SJ0023、SJ0024  
図版5 SX0001、SX0002、SX0003、SX0006、  
SX0007  
図版6 SX0008、SX0010、SB0005、SB0005炉、  
SH0004、SP0003、SS0003  
図版7 繩文早期の土器  
図版8 繩文早期、後期の土器  
図版9 繩文後期の土器  
図版10 石器類

# 目 次

第1章 発掘調査の概要	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経緯	1
第3節 発掘調査の組織	1
第4節 発掘調査の方法	1
第2章 環 境	
第1節 遺跡の環境	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3章 奈良・平安時代の遺構と遺物	
第1節 奈良・平安時代の遺構	3
第2節 奈良・平安時代の遺物	7
第4章 繩文時代の遺構と遺物	
第1節 繩文時代の遺構	13
第2節 繩文時代の遺物	21
第5章 まとめ	
第1節 奈良・平安時代	26
第2節 繩文時代	32
第6章 外ガイド遺跡のテフラ	45



第1図 外ガイド遺跡位置図



第2図 周辺の遺跡

- No.1 吉久保1洞元、No.2 吉久保2洞元、No.3 原遺跡、No.4 吉久保遺跡、No.5 下門原遺跡、No.6 横道B遺跡、
- No.7 横道A遺跡、No.8 寺門A遺跡、No.9 寺門B遺跡、No.10 寺門口遺跡、No.11 墓遺跡、No.12 房氏遺跡、
- No.13 上原遺跡、No.14 外ガイド遺跡、No.15 連野遺跡、No.16 足ノ口遺跡

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 発掘調査に至る経緯

山梨県大月市初狩町3493-1 ほかに山梨リニア実験線の建設が計画された。この付近は外ガイド遺跡として、昭和56年度の全国遺跡地図（山梨県）に掲載された周知の遺跡が存在しており、日本鉄道建設公団、山梨県リニアモーターカー推進局、山梨県教育委員会との間で協議がなされた。予定地は外ガイド遺跡の中でも谷頭に近く、日照条件の優れてない地区であったので、遺跡が山梨リニア実験線建設予定地まで広がっているか危ぶまれた。そこで、まず遺跡の所在確認が平成2年8月27、28日の両日、重機を使用して実施された。結果、平安時代の住居址を確認し、本発掘が必要なことが日本鉄道建設公団と県教育委員会との間で確認され、諸条件が整い次第、発掘調査を実施することが決定された。

## 第2節 発掘調査の経緯

平成3年7月17日 埋蔵文化財発掘調査の届け出提出  
平成3年10月2日 発掘調査開始  
平成3年12月24日 発掘調査終了  
平成4年1月6日 遺物発見届提出  
整理作業の経緯  
平成7年1月10日 整理作業開始  
平成7年3月25日 整理作業終了

## 第3節 発掘調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会  
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター  
調査担当者 小野正文（副主査・文化財主事）  
早川典孝（文化財主事）  
保坂裕史（文化財主事）  
森原明廣（文化財主事）

### 発掘調査参加者名簿

小林光輝、陰山一子、小俣京子、室岡笑子、小林藤子、天野つるゑ、藤本芳一、小林すゑ子、齊藤幸枝、森川満江、田中涼、小室克也、高橋泰栄、小俣令江、高田叔江、小林みづ子、古屋里美、飯島与一、山岸孝行、清水睦江、杉本久巳子、藤本妙子、平山とみ子、奥脇つな江、福島武治、小林初代、

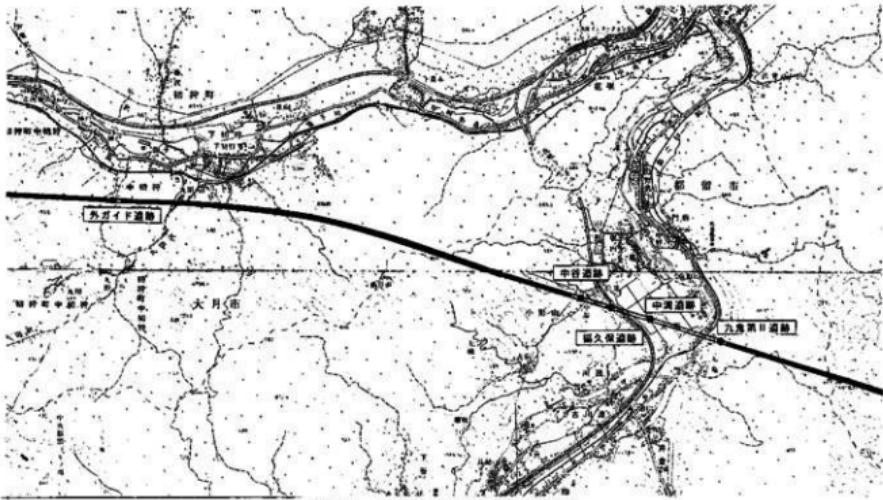
### 整理作業参加者

石原清子、矢崎綠、荒川公子、荒川奈津江、富永小枝、飯田みづほ、中川美千子、安藤純子、小沢恵津子、雨宮千尋、山崎靖子、渡辺徳子、雨宮滋美、星野松子

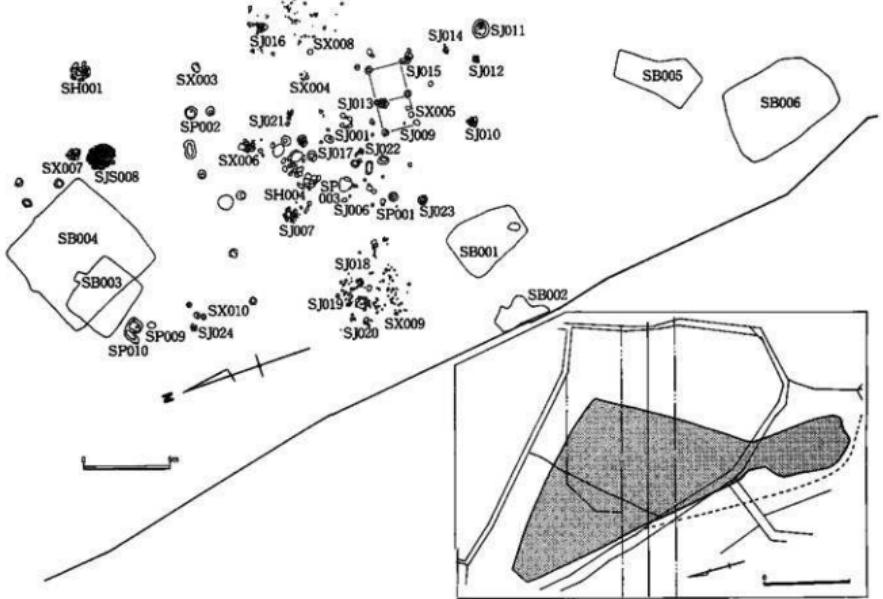
## 第4節 発掘調査の方法

平成3年8月に試掘調査を実施し、遺物包含層を確認しておいたので、発掘調査は重機で表土を除去する方法をとった。現地は畠地が放置され、茅や低木が生い茂り、それらを撤去するのに多くの時間を費やした。

表土除去後、発掘区域に通常のグリットは設定せずに、遺物と遺構の測点はすべて光波測量機によって取り上げる方法をとった。ただし最初の数日間の重機廃土後の表面精査の段階のものは、一括して取り上げたものがある。



第3図 山梨リニア実験線関係道路



第4図 外ガイド道筋全体図

## 第2章 環 境

### 第1節 遺跡の環境

遺跡は山梨県大月市初狩町3493-1ほかに所在する。相模川水系の支流の笛子川の支流である宮川と八田川に挟まれた、標高477メートルの平坦地に立地する。特に宮川が高川山の山系から押し出した扇状地状の地形である。遺跡は谷頭に近く、南東に山系が迫っているため、発掘調査期間であった晩秋には日の出が遅く、日没が2時頃という環境であり、縄文時代、平安時代においても居住条件はそれほど恵まれない立地といえる。

縄文後期には当地方では都留市中谷遺跡をはじめとして中期の台地上の立地から、こうした山陰に入ったような立地になる傾向が見うけられる。

### 第2節 周辺の遺跡

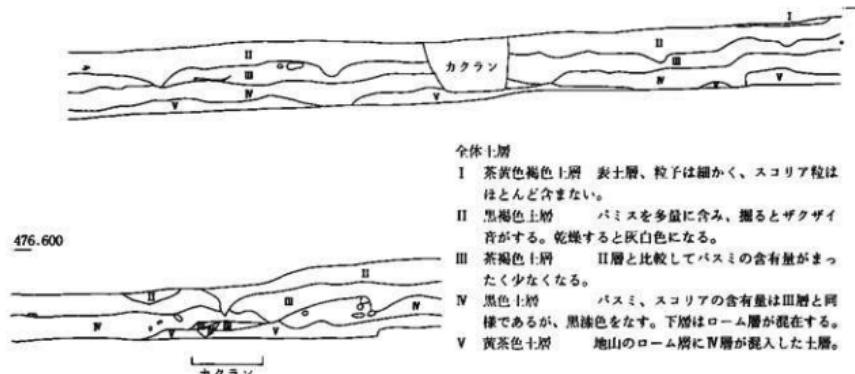
山梨リニア実験線の先行区間は都留市から大月市笛子に至る延長18.4kmである。ほとんどがトンネルで地上の部分は僅かであるが、地上に出た部分やオープンカットで工事を実施する部分に5ヵ所の遺跡があり、発掘調査を実施した。東から都留市の九鬼第II遺跡、同市中溝遺跡、同市揚久保遺跡、同市中谷遺跡があり、大月市では外ガイド遺跡がある。

外ガイド遺跡周辺には、上原遺跡、連野遺跡、堀遺跡があり、笛子川沿いには寺門口遺跡、房氏遺跡があり、外ガイド遺跡から見れば、北に見える沢の藤沢川にそって寺門B遺跡、寺門B遺跡、横道B遺跡、下門原遺跡、吉久保遺跡が連なる。

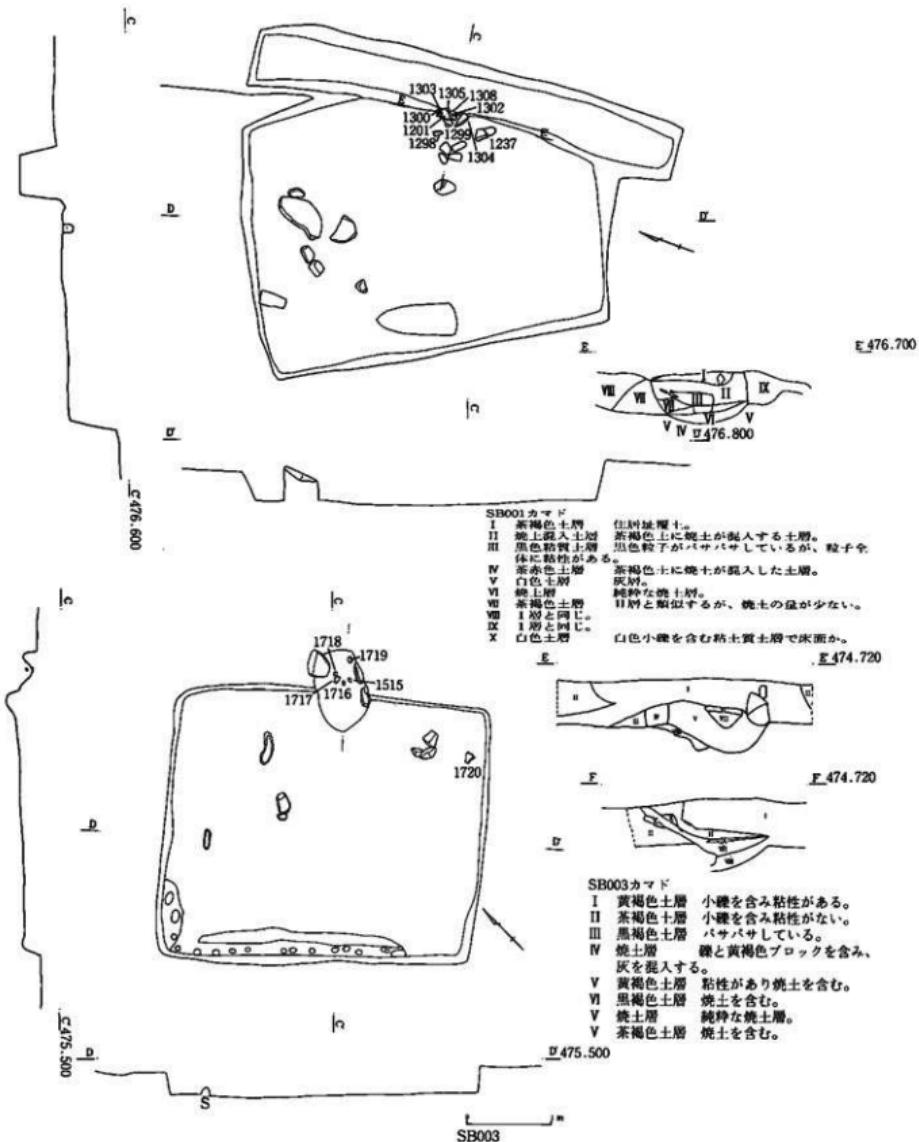
## 第3章 奈良・平安時代の遺構と遺物

### 第1節 奈良・平安時代の遺構

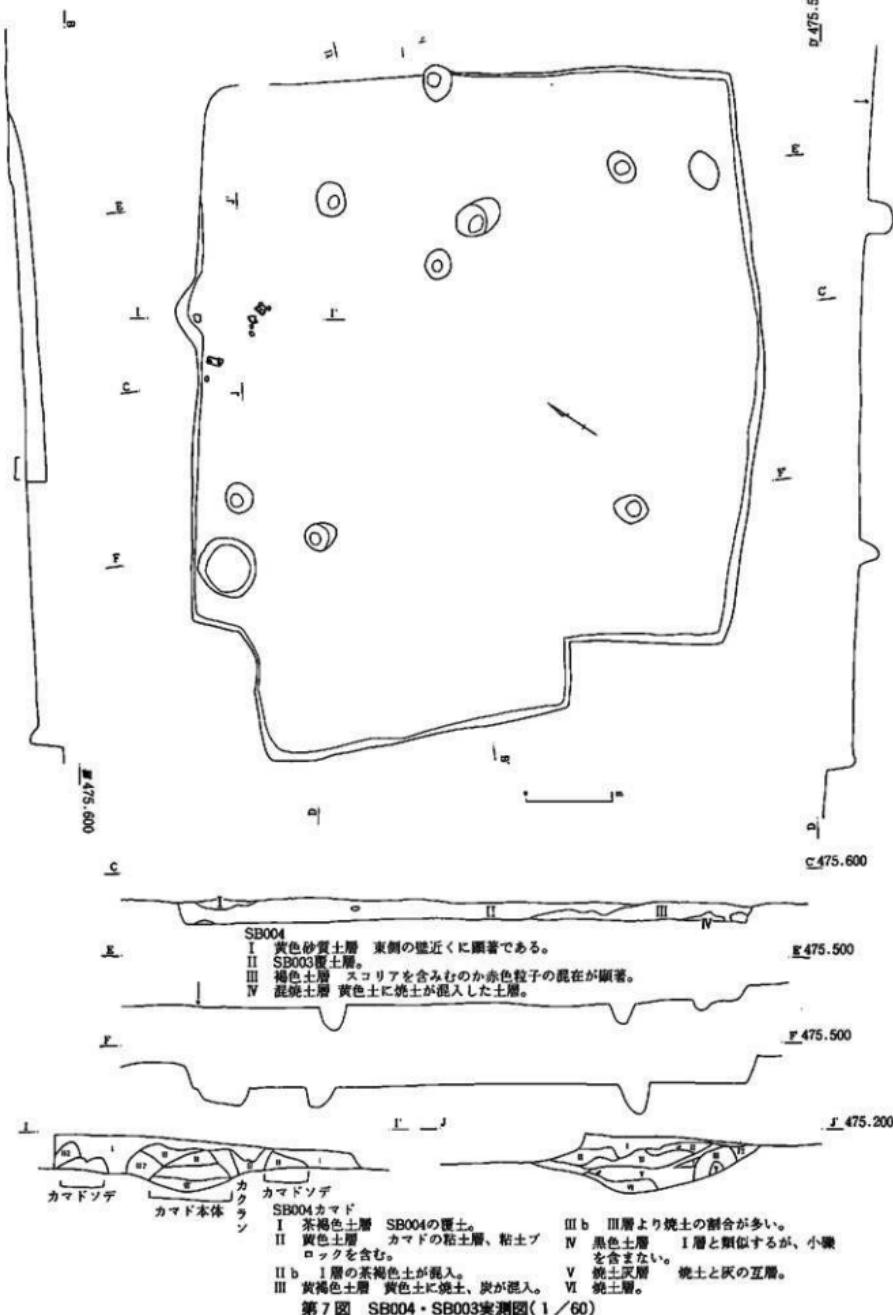
SB001（1号住居址、第6図）遺跡の存在を確認するために、重機でトレーニチをいたが、そのトレーニチにカ



第5図 土層図(1/60)



第6図 SB001・SB003実測図(1/60)



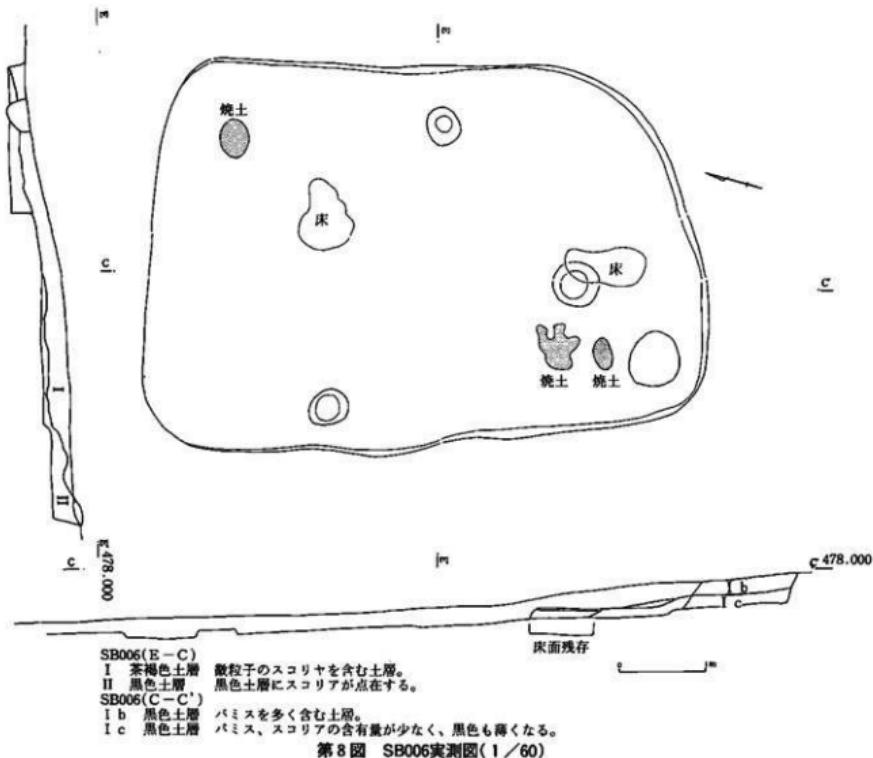
マドがかかり、遺跡の発掘調査の発端になったものである。長軸210cm、単軸約160cm、壁高約20cmを測る。カマドはほぼ半壊していたが、試掘時に墨書き土器などが出土した。

SB002（2号住居址、第4図）調査区の西端で床面と焼土を検出し、付近から平安時代の土器の出土もみられたので、住居址の存在を確定した。

SB003（3号住居址、第6図）東西辺が約330cm、南北辺が約320cm、壁高40cmの方形をなす竪穴住居である。北辺の中央部にカマドをもつ、南辺には壁構と壁柱穴13個が検出された。また南辺から西辺に移る角の部分にも壁柱穴3個が検出された。カマドはほぼ全壊しており、構築材の一部の石が検出されたのみで、カマドの中からも土器片が数点認められたにすぎない。

SB004（4号住居址、第7図）東西640cm、640cmの方形の竪穴住居で3号住居址を切って構築されていた。北辺では壁高がほとんどない状態であるが、住居址の大きさはほぼ確定できた。柱穴と思われる穴もいくつか検出したが、エレベーション図に示したもの4柱穴が、本来の柱穴と思われる。図面終了後掘り方まで調査したが、新たなピットは検出されなかった。

SB006（6号住居址、第8図）南北660cm、東西440cmの隅丸長方形の住居址である。カマドは検出されず、焼土が数箇所に認められた。土器の集中は見られたが、土層図でも明らかのように住居址覆土の堆積が明瞭に把握されず、床面も部分的にしか検出されなかつたため、結果的に掘り方部まで掘り込んだ状態であった。出土遺物は当遺跡の平安期の遺構としては非常に多い。



SP009（9号土坑、第13図）SP010に隣接した土坑である。縦49cm、横39cm、深さ22cmを測る。

SP010（10号土坑、第13図）確認面では1つの土坑であったが、調査を進めた時点では2基の土坑となった。SP010Aを縦91cm、横76cm、深さ22cm、同SP010B縦115cm、横46cm、深さ20cmで、Aからは平安時代の土器片と骨片が出土したので、墓坑と思われる。

SP011（11号土坑、第13図）縦160cm、横117cm、深さ81cmの土坑である。中から縄文土器が出土しているが、所属時期は不明である。

## 第2節 奈良・平安時代の出土遺物

SB001（1号住居址）の出土遺物（第10図）試掘調査の折り、カマドの一部を破壊してしまったが、形状の確認できる壺、甕を検出している。甲斐型の甕は破片数で61、壺之内原タイプの甕は2点である。

SB003（3号住居址）の出土遺物（第11図）。この住居址の出土遺物は比較的少なく、図化できたのは2片にとどまった。土師壺から、4号住居址より新しいことは明らかである。甕は甲斐型のものが破片で63点、壺之内原タイプのもの1点である。重複関係があることから混入と考えられる。3号住居址の時期には甲斐型甕がこの地方に分布したものと思われる。

SB004（4号住居址）の出土遺物（第11図）この住居址からは時期の異なる壺（第10図5）の出土があるが、他の壺からもっとも古い時期に位置づけられる。甕に国中地方とは違った様相が現れている。タタキメの甕の大形破片の出土（巨摩郡型）が見られ、いわゆる壺之内原タイプの甕が44点、甲斐型甕が4点である。より古い時期には壺之内原タイプの甕が普及していたことを示すものと思われる。

SB006（6号住居址）の出土遺物（第12図）6号住居址はカマドが確認できず、形状の明確でない住居址であったが出土遺物は豊富である。甲斐型の壺が多く出土し、中には若干胎土を異にする壺（第12図2）があるが、壺之内原タイプの壺ではない。甕は甲斐型が破片で51点で壺之内原タイプの甕の出土はない。

その他遺構外出土遺物（第9、10図）第10図10は灰釉陶器の破片を利用した転用硯と呼ばれるものである。11は灰釉陶器の底部で、12は土鍤である。第11図は墨書き土器の破片で、文字の判読できるものは1が「千」と思われる。12は朱墨である。6号住居址からは灰釉陶器の底部を利用した転用硯の朱墨の硯が出土している。17は壺の内面に墨書きがある。

外ガイド奈良・平安期土器観察表

SB001

番号	種類	器形	口径	底径	器高	胎土	色調	残存率	備考
1	土師器	壺	13.8			緻密	赤褐色	5%	外面ヘラケズリ
2	"	壺	12	6	4.5	緻密	赤褐色	95%	見込み暗文、外面ヘラケズリ
3	"	壺		5.7		緻密		40%	底部墨書き、外面ヘラケズリ
4		甕		7.5			黒褐色		甲斐型
5		甕	21.2				黒褐色		甲斐型

確認面出土土器

1	土師器	壺	12.8	6.2	4.3	緻密	明褐色	15%	外面底部ヘラケズリ
2	"		14.2			"	"	15%	
3			12.4			"	内面黒色	10%	
4			11.7			"		25%	外面ヘラケズリ
5			14.8			"		15%	外面ヘラケズリ
6			12.2			含蓋母	茶褐色	15%	外面ヘラケズリ
7			13.8	5.6	3.1	緻密	明褐色	20%	外面ヘラケズリ 底部ヘラケズリ
8			11.4			"	内面黒色	10%	

9			14.0			〃	〃	10%	
10	須恵器								転用硯
11	灰釉陶器								
12	土師器								
13	土鏡								

SB003

1	土師器	坏		6.5		緻密含雲母	明褐色内面 黒色	25%	見込み暗文 外面ヘラケズリ
2		甕					黒褐色		

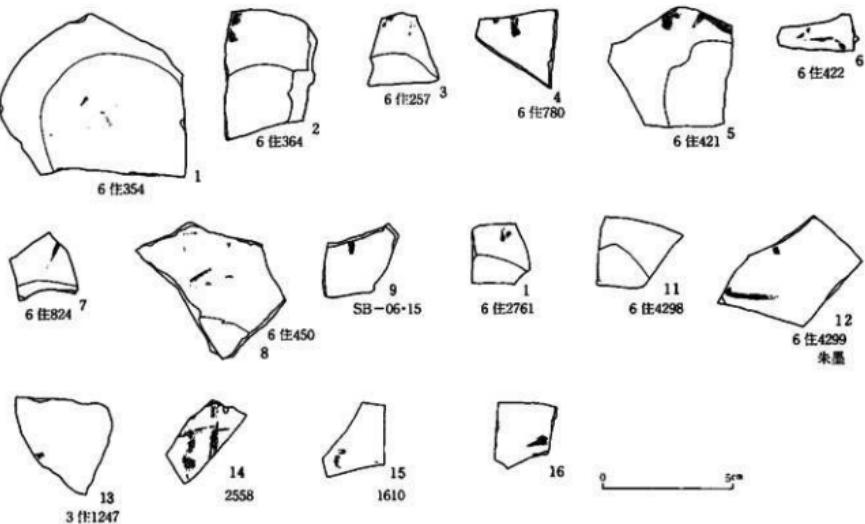
SB004

1	土師器	坏		17.4		緻密	明褐色	10%	
2	"	"		15.0		"含雲母	"	5%	
3	"	"		15.0		"	"	10%	
4	"	"			9.0	"	"	30%	
5	"	"		15.0		"	"	10%	外面ヘラケズリ
6	"	甕					"		タタキメ
7	"	"	20				黒褐色		ヘラケズリ
8	"	"	20				明褐色		
9	"	"	19.8						
10	"	"	13						
11	"	"		18.5					
12	須恵器	甕							転用硯

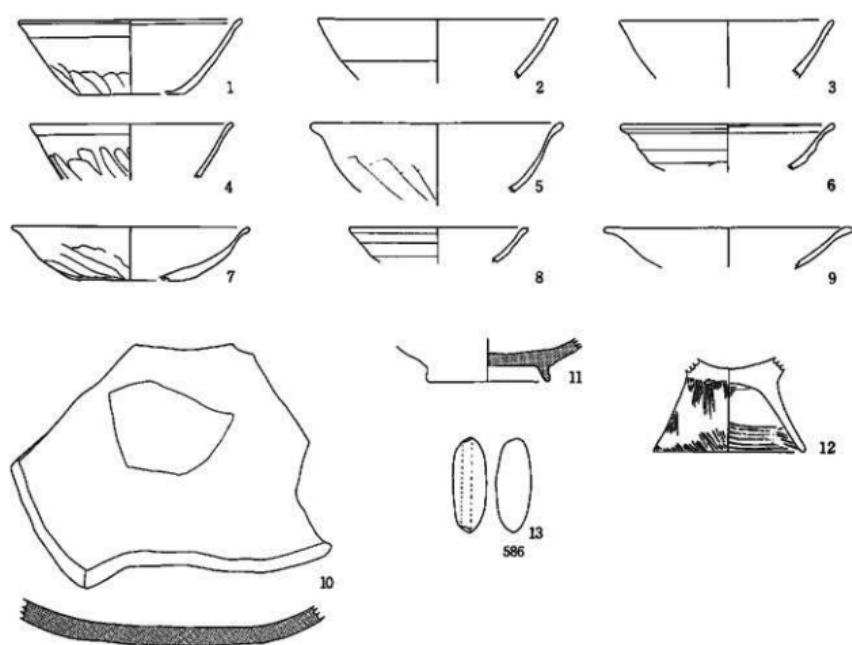
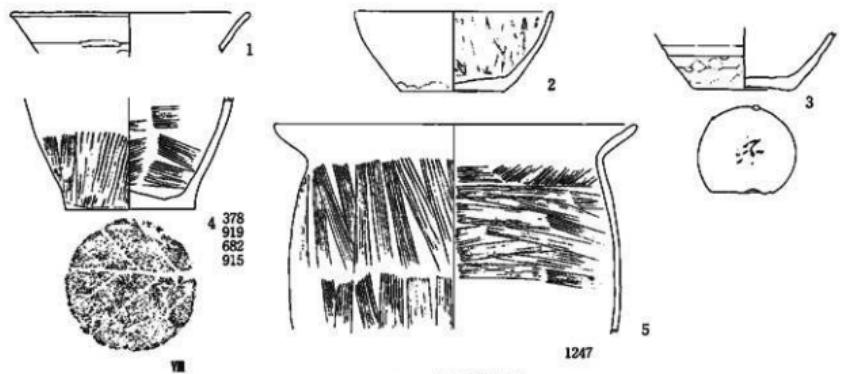
SB006

1	灰釉陶器	坏				緻密含雲母	灰色	20%	
2	土師器	坏	14.0			緻密含雲母	明褐色	15%	外面ヘラケズリ
3	"	"	14.0			緻密	"	10%	外面ヘラケズリ
4	"	"	16.0			"		30%	外面ヘラケズリ
5	"	"	12.8			"	"	10%	
6	"	"	10.9			"	"	15%	
7	"	"	13.8			"	"	5%	
8	"	"	14.0			"	"	5%	
9	"	"	12.4			"	"	5%	
10	"	"	14.4			"	"	5%	
11	"	"	11.5			"	"	5%	
12	"	"	10.8			"	"	15%	外面ヘラケズリ
13	"	"	12.6			"	"	5%	
14	"	"	13.4			"	"	5%	
15	"	"	15.0			"	"	5%	外面ヘラケズリ
16	"	"	12.0	5.5	4.5	"	"	20%	外面ヘラケズリ
17	"	"	13.5			"	"	10%	外面ヘラケズリ
18	"	"	12.0			"	"	5%	外面ヘラケズリ
19	"	"	14.0			"	"	10%	外面ヘラケズリ
20	"	"	12.0	4.0	3.3	緻密 含雲母	"	25%"	外面底部ヘラケズリ
21	"	"	15.2	5.5	4.5	緻密	赤褐色	20%	外面底部ヘラケズリ
22	"	"	15.0			"	明褐色	10%	
23	"	"	12.0			"	"	10%	外面ヘラケズリ
24	"	"	11.8			"	"	10%	外面ヘラケズリ

25	"	"	12.8		"	"	5%	
26	"	"	16.6		"	"	5%	外面ヘラケズリ
27	"	"	15.6	緻密含雲母	"	"	5%	
28	"	"	11.6		"	"	10%	外面ヘラケズリ墨書
29	"	"	13.6	緻密含雲母	"	"	5%	
30	"	"	12.2		赤褐色		15%	外面ヘラケズリ
31	"	"	13.8	緻密含雲母			10%	外面ヘラケズリ
32	"	"	12.2				5%	
33	"	"	14.4		緻密含雲母 内面黑色	明褐色	10%	
34	"	"	14.6		緻密含雲母	明褐色	15%	
35	"	"	12.8	緻密	"	"	5%	
36	"	"	14.6		"	"	5%	
37	"	"	11.4		"	"	5%	
38	"	"	11.8		赤褐色		5%	
39	灰釉陶器	高台 环						
40	灰釉陶器	灰釉 环						朱墨転用硯



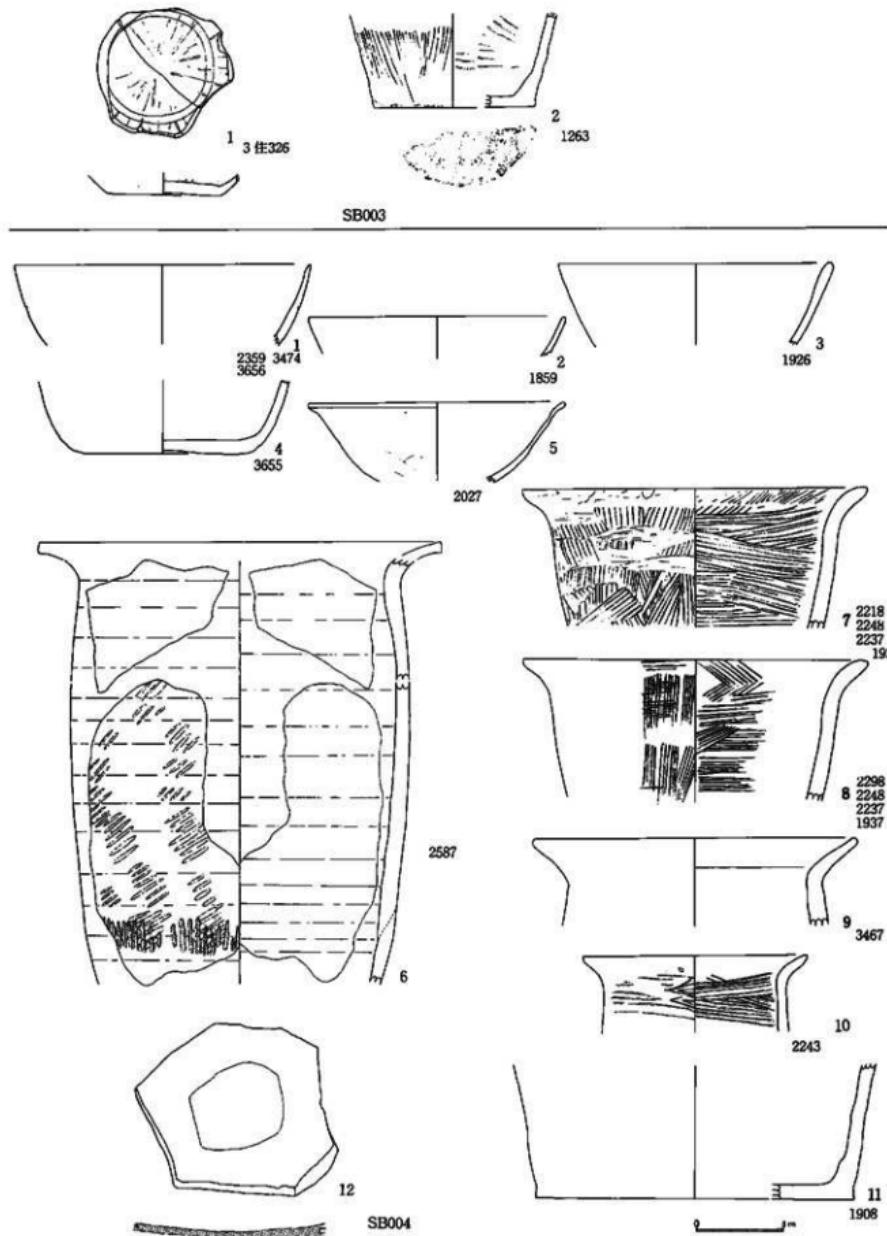
第9図 墨書土器など(1／2)



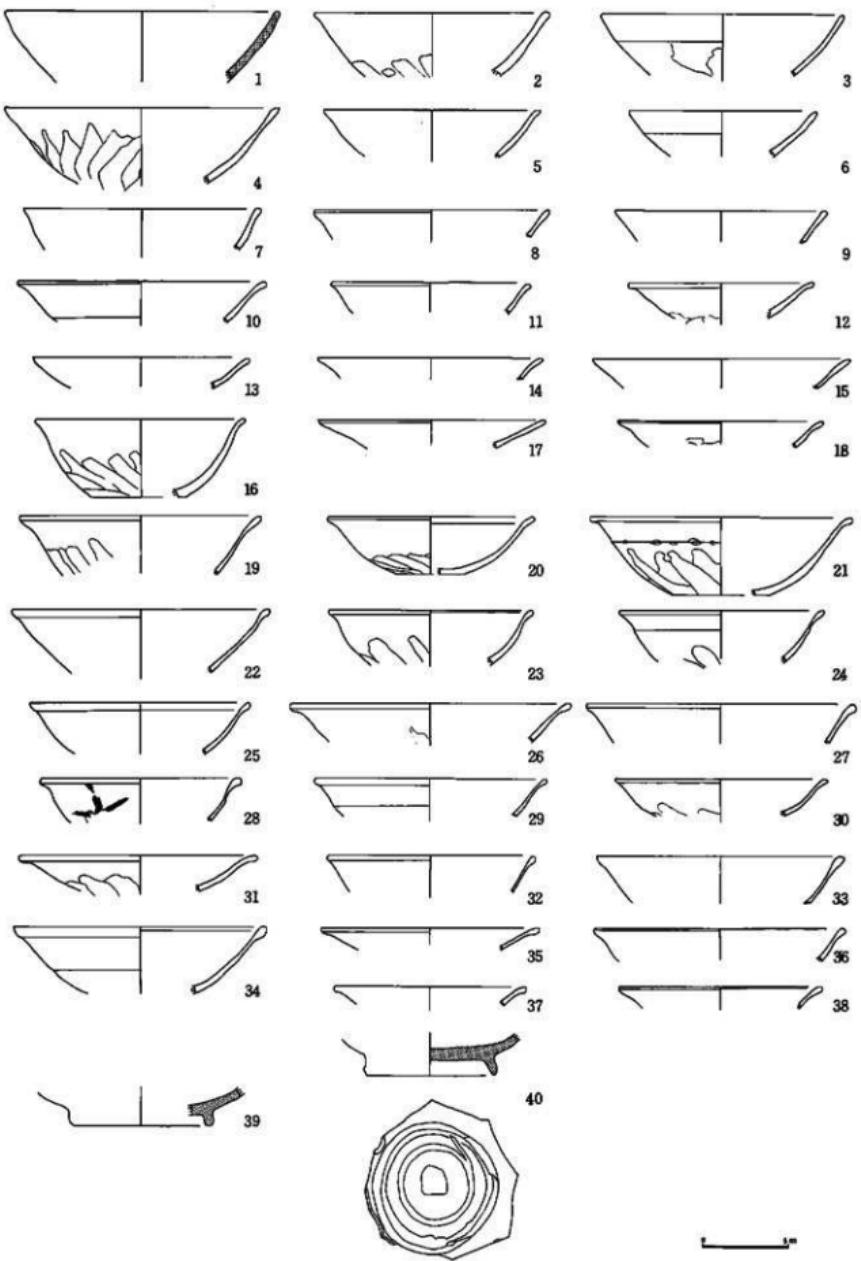
確認面出土遺物

1cm

第10図 SB001出土遺物、確認面出土遺物(1/3)



第11図 SB003・SB004出土遺物(1 / 3)



第12図 SB006出土遺物(1 / 3)

## 第4章 繩文時代の遺構と遺物

### 第1節 繩文時代の遺構

#### 住居址

SX005（敷石住居址、第13図）当初2号配石と5号配石と認識していたが、2号配石が柄鏡型敷石住居址の柄の部分であり、北方向に柄が伸びた形態である。炉は地山に包含される泥岩を方形に組んだ石囲炉である。敷石の部分はほとんど残存していないが、かろうじて縁石が約300cmほど残っていたため全形が確認できたものである。炉に近接して焼土が検出された。

#### 掘立柱建物址など

SJ009（第14図）は柱穴間180cm～210cmを測り、整然と6柱穴が並んでおり、掘立柱建物址と認定した。検出層位は下層になってしまったが、明茶褐色をなす土層が充填してあったので、SX005である埋甕内の土層と同一であるので、繩文後期初頭の遺構と判断した。

SX010（第17図）は5個の穴が認められたが、柱穴とする規則性は認められなかった。

SX015（第16図）はSX008付近に2個所の柱穴と思われるものを検出したが、柱穴の展開は認められなかった。

#### 配石遺構

SH001（1号配石、第18図）直径1.2mを測る円形の配石である。約30×20cmの河原石を円形に配列し、中に偏平な大型の石を置いたものである。下部には土坑などは検出されなかった。

SH004（4号配石、第18図）長軸が約230cm、単軸が約130cmの敷石と縁石が確認された配石遺構である。縁石の組み方から敷石住居址の一部と考えられたが、炉址は検出されず、配石遺構と確定した。

#### 石囲炉など

SJ001（第18図）は石囲炉で80×90cmを測り、一部の石は抜かれているが、石囲の内側の面が焼成を受けており、後期の石囲炉と思われる。

SX006（第14図、第19図）は立石のある石囲炉で、周囲にピットがあることから、後期の住居址と考えられる。またこの石囲炉の形態から他の石組炉についても、後期に属するものが多いと思われる。石を縦に用いることはほとんどの石組炉に共通しているが、底に石を敷き詰めることは他にSJ016に特徴的である。

SP003（第17図）は、ピット群（SP004～008）の一部として調査を進めたが、周囲のピットからは住居址の想定は困難であるが、炉址の全壊したものと判断される。

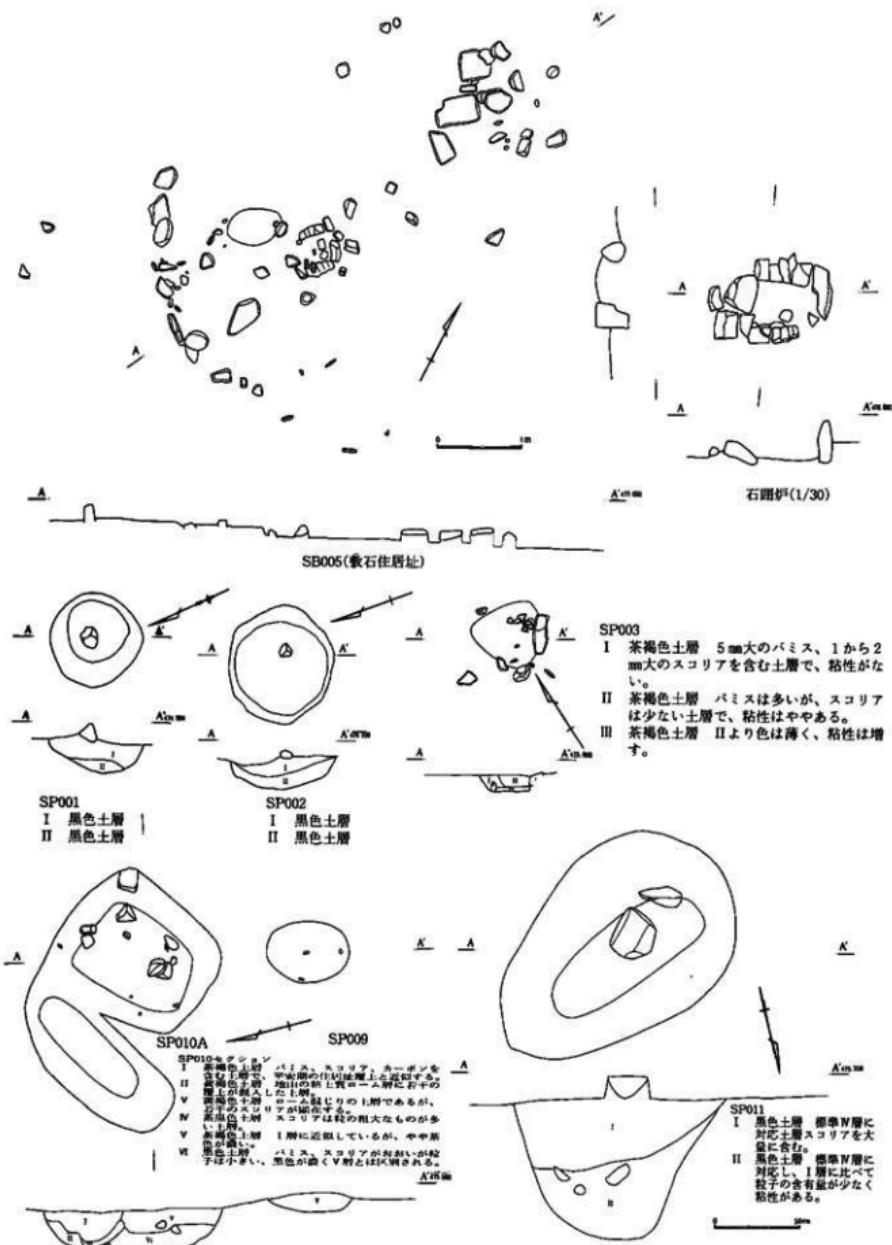
SJ016（第20図）はSX006とほぼ同様な構造を持ち、立石状の石と底に石を敷くものであるが、周囲からは住居址と判断されるようなピットは検出されなかった。

#### 埋甕

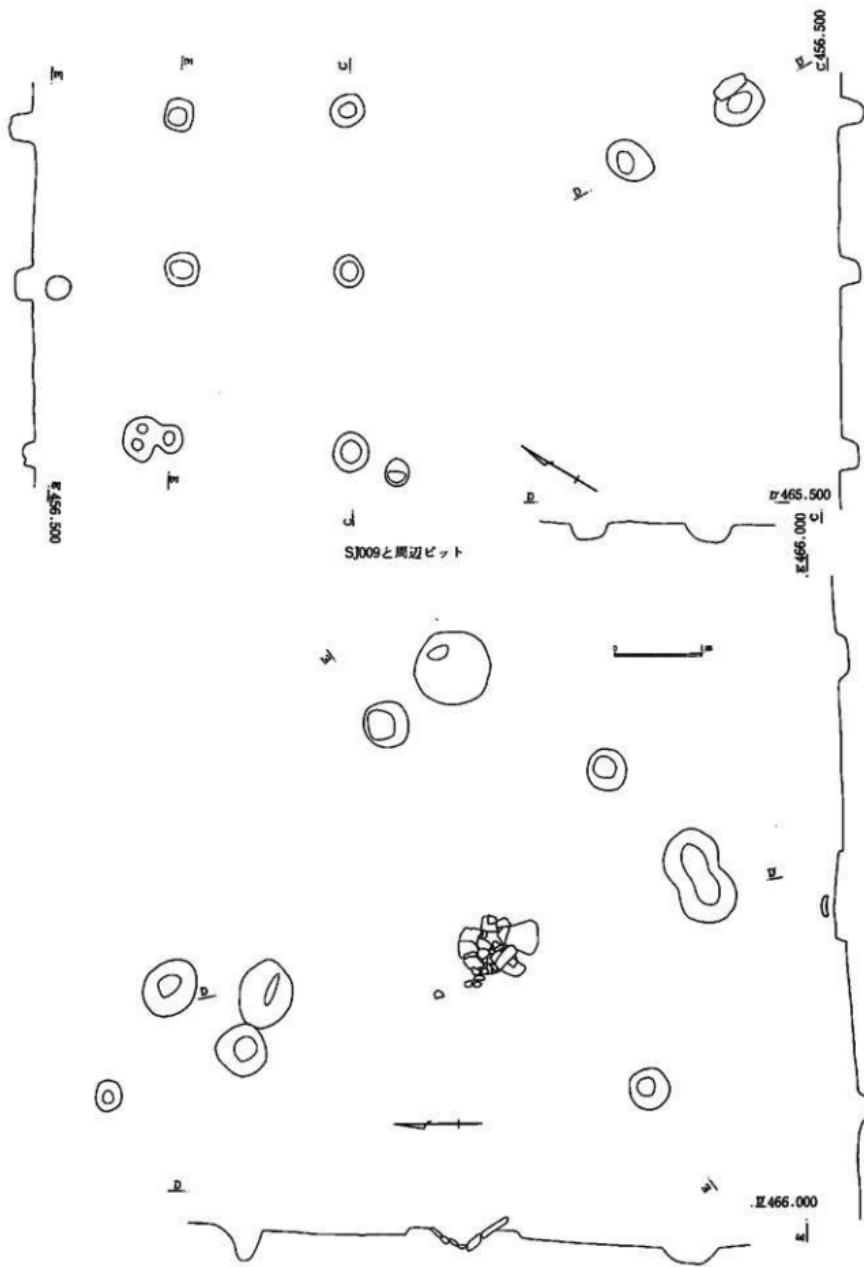
SX002（第18図）堀之内式の小型深鉢の頸部以上が逆位の状態で検出されたものであるが、埋甕として意識的に埋設したものか、単なる包含層の土器なのかは明確でない。

SX004（第18図）堀之内式の無文の浅鉢が埋設されたもので、周囲に伴うと思われる遺構がないので、単独埋甕と考えられる。

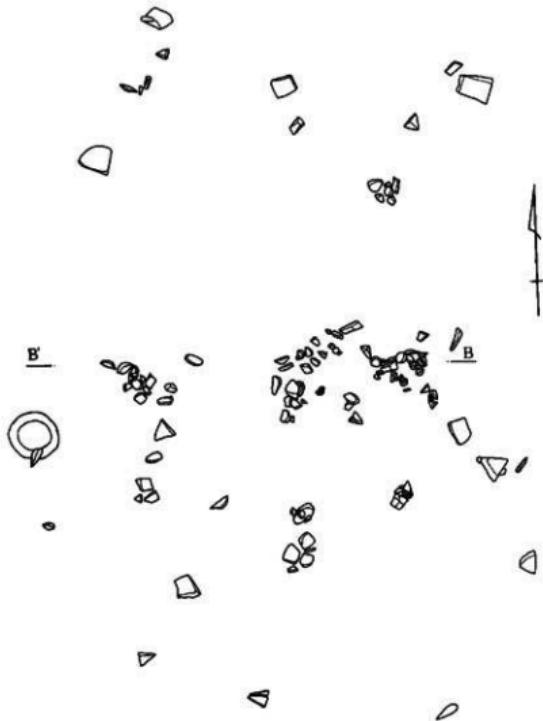
SX005（第18図）堀之内式の沈線で藤手文を施した深鉢である。後日判明したことだが、SJ009の柱穴の埋土と埋甕が包含されていた土層が同一層だったので、この埋甕はSJ009の掘立柱建物址に伴う可能性がある。



第13図 SB005(1/60)、SP001~03、SP09~01(1/30)



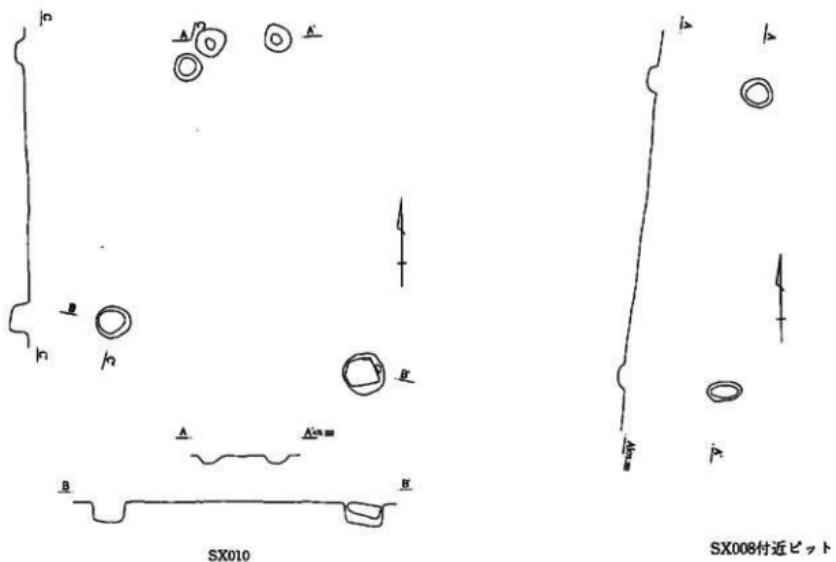
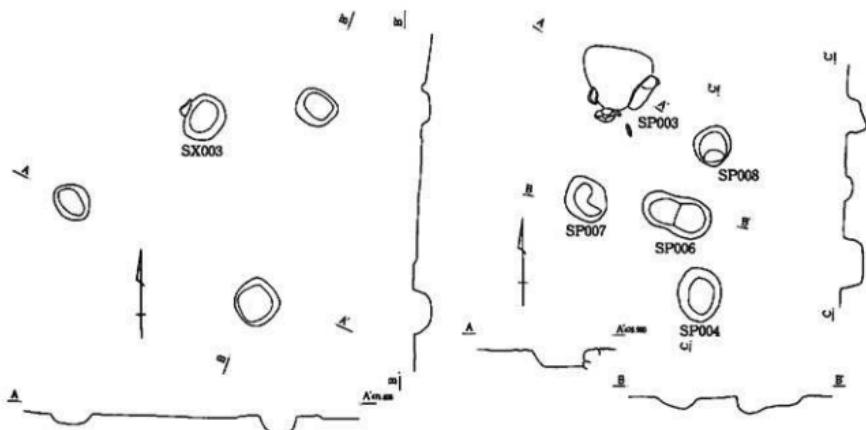
第14圖 S1009 + SX006(1 / 60)



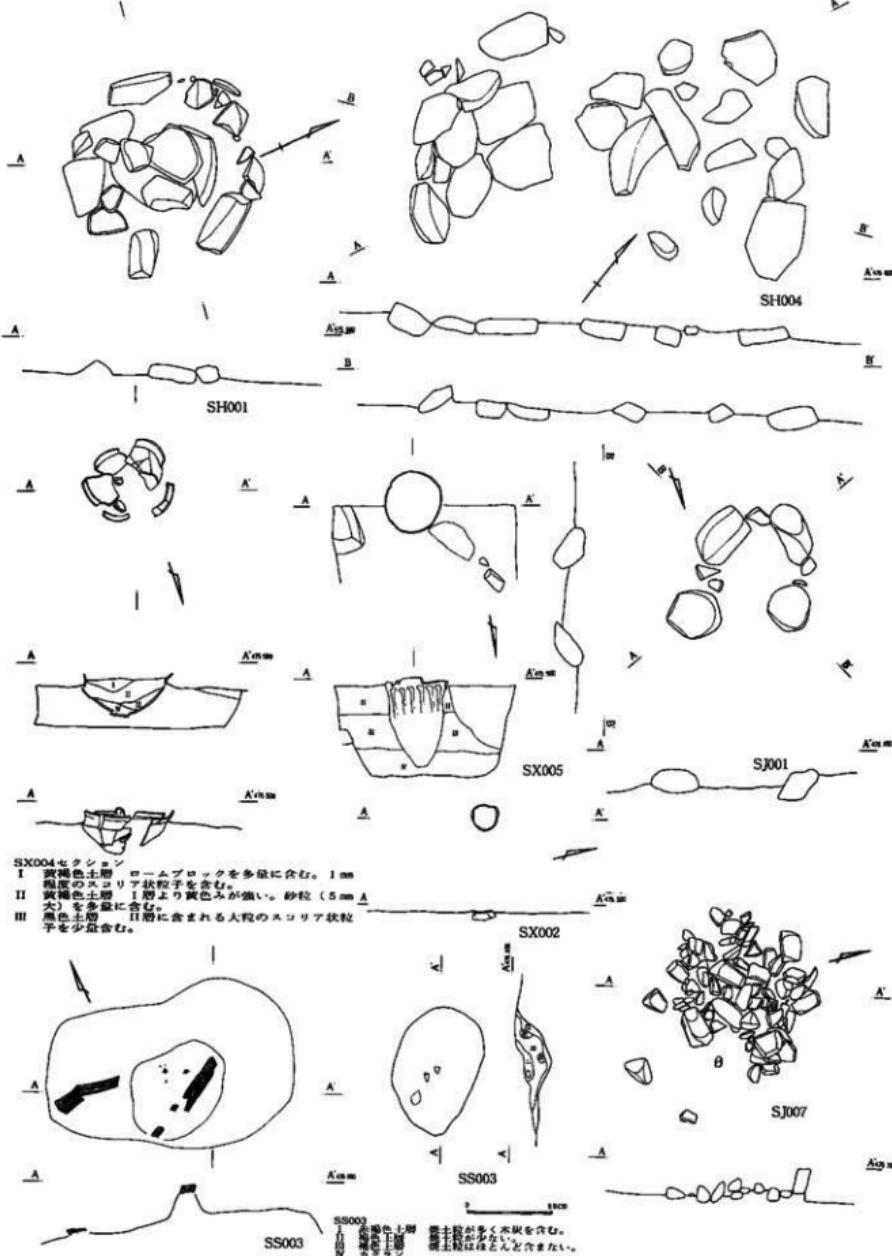
第15図 SX008(1 / 60)



第16図 SX009(1 / 60)

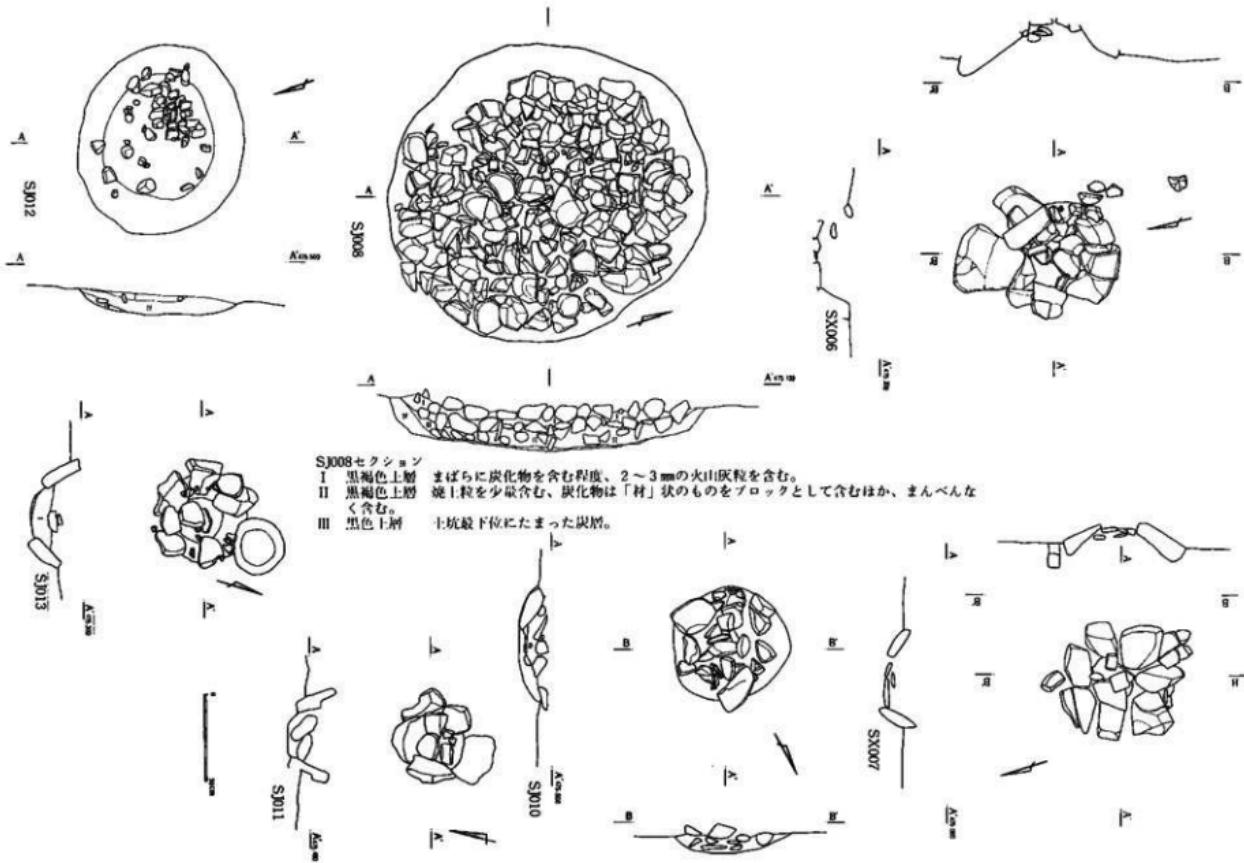


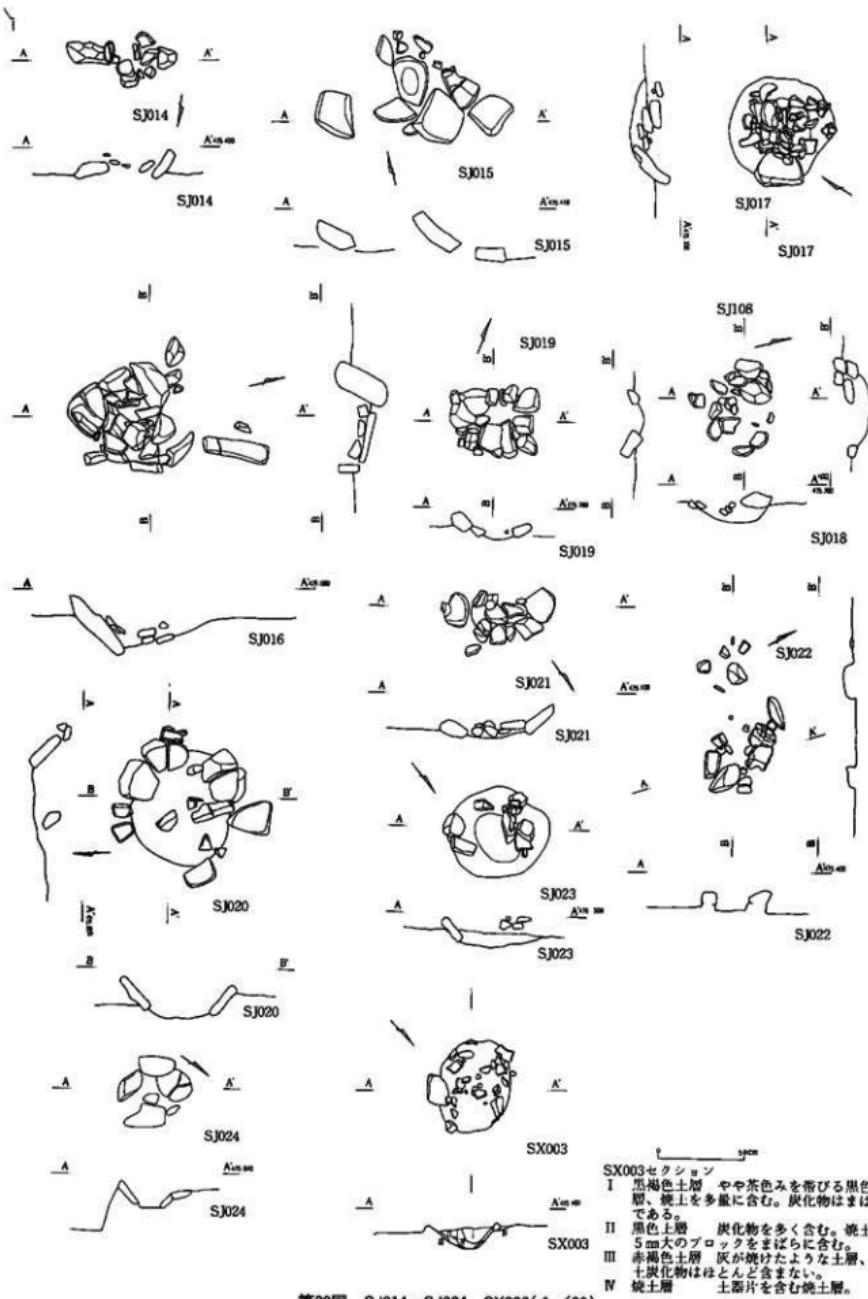
第17図 SP008、SX010、SX015(1/60)



第18図 SH001、SH004、SX004、SX005、SJ001、SJ007(1/30)

SJ008セクション  
 I 黒褐色上層 まばらに炭化物を含む程度、2~3mmの火山灰粒を含む。  
 II 黒褐色上層 灰土粒を少量含む、炭化物は「材」状のものをブロックとして含むほか、まんべんなく含む。  
 III 黒色上層 土坑壁下位にたまたま炭層。





第20図 SJ014～SJ024、SX003(1 / 30)

## 集石・石組など

SJ007（第18図）径約80cmのほぼ円形の集石遺構で、拳大から人頭大までの石を用いて、下部に土坑の存在は確認できなかったものである。特に焼土及び石の被熱は認められなかった。

SJ008（第19図）径約180cm、深さ約30cmの円形土坑の中に角礫を充填したものである。下部には厚さ10cmの灰と炭の層が確認され、縄文早期に見られる集石炉と見なす事ができる。

SJ010（第19図）径約60cm、深さ約10cmの円形土坑に、川原石が入れられたものである。

SJ011（第19図）径約40cmの土坑に偏平な石を立てて囲ったものである。底に石をしかないことおよび小型であることから、早期に属する遺構である。

SJ012（第19図）径約110cm、深さ14cmの円形土坑に拳大ほどの石が散在した遺構である。層位的に早期の遺構と考えられる。

SJ013（第19図）径50cmの土坑の壁に偏平な石をはった炉と思われる遺構である。SJ009（第14図）のピットによって一部を破壊されている。

SJ014（第20図）石組炉の形状はほとんど保っていないが、西端の石が立てて組まれたので、石組炉と判別して番号を付した。

SJ015（第20図）これも石組炉の形状はほとんど保っていない。他の石組よりやや大きい偏平な石を用いているので、あるいは後期の配石遺構の一部である可能性もある。

SJ017（第20図）径60cm、深さ10cmの円形土坑の西端にやや大きい石を張り、土坑内に拳大の石が詰まった状態で確認された。

SJ018（第20図）径40cmの土坑に人頭大より小さい石が散在したもので、石の状況から早期の石組炉の半壊したものと思われる。

SJ019（第20図）縦30cm、横50cmの方形の石組炉で、周辺のSJ020などから早期に属するものとは思われるが、形状が特殊な石組炉である。

SJ020（第20図）円形土坑に石を貼ったもので、ほぼ半壊しているものの早期の石組炉と見なしてよいものと考える。

SJ021（第20図）土坑の形状は把握できなかったが、浅い窪地に石を貼ったもので、やはり早期の石組炉と見なすことができる。

SJ022（第20図）ほぼ全壊しており、本来形状は不明だが、石のまとまりを石組炉とした。

SJ023（第20図）径50cmの土坑に石が散在したもので、石組炉の半壊したものと認定される。

SJ024（第20図）径40cmの土坑に石を貼ったもので、早期の石組炉と認定される。

## その他不明遺構

SX008（第15図）SJ016より東側に疊の集石が認められたが、遺構とすべき人為的配列は認められなかった。

SX009（第16図）SJ018、SJ019、SJ020などの周辺の疊群をSX009としたが、石組炉周辺に疊を集めたような様相を示していた。

## 第2節 縄文時代の遺物

### 第1群土器 縄文早期の土器群（第21図）押型文土器

本遺跡の押型文土器は楕円押型土器のみである。(1)は長さ20cmの棒軸に縦3単位、横2単位の楕円文を刻んでいる。金色の雲母を含むものや輝石を含むものがあり、作成時に胎土に考慮した様相が窺える。また、特に粘土紐の接合時に施文面は新たに粘土を貼るようであり、しばしば下層の楕円文が見えるもの(8、18、50)がある。

a類 砂粒を多く含むもの(長石などの白色砂粒)(1、4、5、7~11、18、24、36)

b類 金色雲母を多く含むもの。上記以外のすべて。33のみがやや偏平な細い楕円文である。40は胎土が黒色を

なし、その中に金色雲母が含まれた特異な土器である。

また、胎土への混入物ではなく、施文方法についてもほとんどの破片に重複施文が認められる。

また内面の成形方法から13、14、19～27、33、40である。他は内面にミガキがほとんどない。施文具はほぼ4種が認められ、1と5などの円形に近い梢円文、2と25などの梢円間がやや間があるもの。8や23に見られるような梢円の間が狭いもの。26、40に見られるようにやや平たい梢円文のもの。33の1例だが小粒の細長い梢円文のものがある。このうち26には異種の施文具による梢円文の重複施文が見られる。

#### 第2群土器 繩文早期土器群（第22図1～26）縄文土器

縄文を施す土器については、前期中葉に属するもの他は、その所属時期の判別が困難なものも多いが、土器の胎土および製作法から早期の押型文土器と類似するものは、本土器群で説明する。本群の土器は粘土の接合部である擬似口縁の部分にしばしば施文が見られる。（第21図1、3）こうした例は当遺跡の押型文土器のおきな特色の一つである。また燃糸文土器（第23図10）にも見られる技法である。前期では駅迎堂Z3式の第1次工程の底の部分を箱型に積み上げた擬似口縁の部分にしばしば見られる。早期から前期中葉までの技法である。

第2群土器は単純な朝顔型の尖底土器で、まったく繊維を含まず、長石、カンラン石など砂粒が目立つ土器である。特に11、14は金色の細かな雲母を含むものである。24は25のほぼ全体が判明する同一個体のものであろう。LRの単節縄文を施文した砂粒の目立つ土器である。

#### 第3群土器 縄文早期の土器群（第23図）燃糸文土器

燃糸文土器は通常縄文早期前半の井草から大浦山式に至る土器群が想起されるが、当遺跡出土の燃糸文土器はこれら早期前半の燃糸文の施文原体と施文技法とは様相が異なっており、一見すると前期の土器のようであり、帰属時期が不明である。胎土に繊維を微量に含むものとまったく含まないものがある。ほとんどRの燃糸文である。

a類 燃りの弱い燃糸文を施したもの。（1、2、3、5、7、8、10、13、14、22、26）この中で、特に1、2、5、6、8、17、29、30は内面を丁寧に磨いている。

b類 燃りの固い燃糸文を施したもの。（6、9、11、12、15～21、23～25、27～30）このうち燃糸文を重複して施文したもの（18、19、29、30）もある。ミガキがあるのは29、30である。18、19は砂粒が表面に浮き出たような状態である。12は器壁も薄く、胎土からも押型文土器と酷似し、当地方でもしばしば押型文土器に伴う燃糸文土器として理解される。

#### 第4群土器 縄文早期の土器群（第24、25図）いわゆる条痕文系土器群

条痕文系土器群を一括した。本土器群の主体となる結節沈線文は、微量な繊維の含有、金色の雲母の含有など当地方の特徴的な胎土であり、比較的まとまって出土したことから一型式の内容をもつものである。施文具、施文方法などから数種に分類される。

a類 丸棒あるいは半截竹管文で押引文を施すもので、押引文の単位によってさらに細別される。

1種 2条の押引文（第24図3、4、5、6、7、8、12、14）このうち1は口辺部文様帯を区画する刺突文が縦（継位）に施されている。7はあるいはb種に属するかもしれない。

2種 3条の押引文（1、2、9、10、11、13）

3種 4条の押引文（16、17or18、30）

b類 口縁部文様帯に区画を施し、その中を刺突文で飾るもの。（20～26）

c類 口縁部文様帯に刺突列文を施すもの。（27、28）27は裏面に条痕を有するものであるが、2点ともに胎土が東海系土器風である。柏烟式に類似する茅山下層式の新しい部分とする考え方もあるが、胎土から東海系のハツ崎式としておきたい。28はやや表情が異なっており、東海系土器と確定してもよいかもしれない。

- d類 口縁部文様帶に細沈線を施すもの。(29~36)
- 1種 口唇部に刻みめを有し、沈線が結節状をなすもの (30, 31)
  - 2種 口唇部に刻みめを有し、沈線を引くもの (29, 32, 34, 35)
  - 3種 文様帶を刺突文で区画するもの (33)
- e類 やや太めの沈線文を施すもの
- 1種 4条の押引文を有するもの。(第25図1~6) これらはもともと2条の半截竹管による沈線を2回引いたものである。子細に見てゆくと、一部押引文風にした部分も見うけられ、a種との関連が伺われる。
  - 2種 2条の格子目状沈線を有するもの (7, 8, 9, 13, 15)
  - 3種 その他 (11, 12, 16, 17)
- f類 格条体圧痕文を施すもの。(20, 21) 20は口辺部に格条体圧痕文をX字状に施し、区画体の下部を丸捺および半截竹管状工具で横位に刺突するもので、第24図9, 10, 33などと共に通する手法である。
- g類 条痕文を有するもの。(24図36, 25図18, 19, 22, 23, 24, 25, 26)
- h類 太い沈線を有するもの。(27) 野島式に属するものと思われる。
- i類 隆蒂文を有するもの。(28) 神之木台式に属するものであろう。

#### 第5群 繩文前・中期の土器群 (第22図)

- 繩文前中期の土器群は中葉以降のものが出土している。
- a類 大型爪形文を有するもの。(第22図27, 28) 前期前半に属するものと思われる。
- b類 釈迦堂Z3式に属する無節の羽条繩文土器など。(第22図29, 30)
- c類 諸磯b式土器 (第22図31~34) 31, 32は繩文、33は浮線文土器、34は沈線文土器。
- d類 諸磯c式土器 (第22図35~41) 竹管による沈線文の上に浮文を施した諸磯c式土器。
- e類 五領ヶ台式土器 (第26図5) 有孔鉢付土器の小型製品である。該期にはしばしばこうした小型品が見られる。

#### 第6群 繩文後期の土器群

- a類 口縁下に円文を巡らし、体部は沈線文を施すもの。(第27図1~13)
- b類 口縁部に沈線を巡らし、屈折部にはしばしば刻み目を施すものが多い。(第27図14~48)
- c類 口縁部に円形程みを2点施し、さらに沈線を巡らすもの。(第28図1~42)
- d類 口縁部に沈線文を巡らすもの。(第29図1~29)
- e類 列点文を施すもの。(第29図30~46)
- f類 体部文様に沈線文を施すもの。(第30~32図) (第26図1, 3, 4) 1は埋甕である。体部文様としていわゆるワラビ手文を12単位施している。3は小型の埋甕で頸部に2条の沈線を巡らし、沈線のつなぎ部に8字状貼付文をつけている。4は体部に沈線文でJ字状や渦巻状の文様を施すものである。第30~33図にも示したように当遺跡の壙之内式土器の主体を占める土器である。
- g類 繩文を有する土器。(第33図1~16, 18~27) 当遺跡の磨消繩文土器は、図示したものであり、沈線文との比率からいえば極少量である。中でも24と25はやや古い部分に属するものと思われる。
- h類 貝殻背圧痕を有する土器である。(第33図28, 29) 後期初頭には称名寺式土器の中に巻き貝を回転押捺したもののが見られるが、壙之内式においては当地方では類例を知らない。
- i類 その他 (第26図2) は埋甕で、無文の浅鉢である。

### 第3節 繩文時代の石器

礫器（第35図1～11、第36図1～6）砂岩及び変成岩の礫を打ち欠いた粗雑な形状の石器である。いわゆる石核石器の部類に属するもの。9はやや形状が分銅型石斧に類するが、厚みと剝離の方法から礫器に属するものである。11のように小型のものもあるが、一般的には重く、大きい石器である。

打製石斧（第36図8～14）8から10はしっかりした形状の短冊形の打製石斧である。

11は分銅型をなしている。縄文後期に属するものと思われる。13、14はやや薄い薄片を利用した打製石器であり、打製石斧に含まれるものと思われる。礫器は縄文早期の貝殻条痕土器に数多く見られる石器である。积遊堂遺跡群では縄文中期まで数は稀少となるが利用されていた。

石匙（第36図15）15は砂岩の石匙で、縄文中期以降見られるものである。

剥片石器（第36図7）7は剥片を利用した横刃の石器である。

磨石（第37図1～14）磨石は14点出土しているが、このうち窪みを有し、窪み石の部類に属するものは、4、5、7、9、10、11である。また、1は断面三角形の縁の部分を使用面としているので、縁磨石に分類される。

小型磨製石斧（第37図28、29）大型の定角式磨製石斧や乳棒状磨製石斧は出土を見なかったが、小型の磨製石斧が2点出土している。いずれも緑色系の蛇紋岩類と思われる。

石鎌（第37図1～27）石材は1、14がチャートで、15が水晶である。他はすべて黒曜石である。9が平基三角鎌である他はすべて凹基三角鎌である。2～6は剥片鎌で五領ヶ台式にも見られるが早期に属するものであろう。

小型磨石（第37図30～34）小型の表面が滑らかな河原石は河川の中下流域では単なる自然遺物と判断されるが、県内の縄文遺跡では遺物として取り上げている。中にはよく磨かれ使用根が明瞭なものがあるが、これらの遺物には特に使用痕は認められなかった。

スクレイパー（第37図35）頁岩製のスクレイパーで石刃を利用して製作されている。押型文期にはしばしば見られる石器である。

図版	番号	名 称	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	その他の
34	1	礫器	11.9	12.0	3.6	658	ホルンフェルス	
	2	礫器	12.0	13.95	4.9	1034	ホルンフェルス	
	3	礫器	15.55	10.35	4.55	758	ホルンフェルス	
	4	礫器	15.6	9.1	5.25	675	砂岩	
	5	礫器	10.17	9.9	3.15	420	ホルンフェルス	
	6	礫器	18.4	8.6	2.8	901	ホルンフェルス	
	7	礫器	16.6	8.6	2.8	378	ホルンフェルス	
	8	礫器	13.2	9.8	5.5	985	泥岩	
	9	礫器	16.3	11.15	3.4	669	ホルンフェルス	
	10	礫器	13.8	9.6	6.25	1031	ホルンフェルス	
	11	礫器	5.1	8.3	2.3	104	ホルンフェルス	
	12	礫器	10.2	10.85	3.1	354	ホルンフェルス	
	13	礫器	11.15	7.7	4.4	420	ホルンフェルス	
	14	礫器	7.5	9.2	3.1	179	ホルンフェルス	
	15	礫器	10.3	7.3	3.2	265	ホルンフェルス	
	15	礫器	11.0	7.9	5.1	478	ホルンフェルス	
	17	礫器	8.7	12.0	3.5	337	砂岩	
	18	礫器	6.15	11.6	2.5	162	砂岩	
	19	打製石斧	16.55	6.7	2.15	306	ホルンフェルス	

	20	打製石斧	15.6	6.0	2.1	176	ホルンフェルス	
	21	打製石斧	13.4	4.9	1.85	102	ホルンフェルス	
	22	打製石斧	12.0	8.5	11.5	180	ホルンフェルス	
	23	打製石斧	7.1	5.6	1.8	100	ホルンフェルス	
	24	打製石斧	12.4	5.6	1.8	133	ホルンフェルス	
	25	石鎚	9.6	3.25	0.85	26	ホルンフェルス	
	26	石匙	5.9	7.5	1.3	47	粘板岩	
	27	鍛磨石	16.8	7.1	7.1	1137	砂岩	
	28	磨石	13.3	7.2	4.9	737	石英閃綠岩	
	29	磨石	9.1	7.65	3.65	359	玄武岩	
	30	磨石	12.0	8.45	4.8	726	石英閃綠岩	
	31	磨石・凹石	11.6	11.3	4.5	731	砂岩	
	32	磨石	11.3	6.1	4.95	738	花崗岩類	
	33	磨石・凹石	11.15	8.05	4.45	684	砂岩	
	34	磨石	11.85	5.0	6.9	530	礫岩	
	35	磨石・凹石	11.8	9.2	3.9	750	輝石安山岩	
	36	磨石・凹石	10.7	8.6	4.4	632	石英閃綠岩	
	37	磨石・凹石	12.15	7.4	4.65	625	綠色變灰岩	
	38	磨石	9.1	9.7	4.1	623	泥岩	
	39	磨石	9.8	6.7	6.3	689	砂岩	
	40	磨石	8.6	6.9	4.8	383	砂岩	
35	1	凹基三角鐵	1.6	1.6	0.5	0.76	チャート	
	2	凹基三角鐵	1.95	1.6	0.45	0.84	黑曜石	剝片鐵
	3	凹基三角鐵	1.95	1.4	0.5	1.03	黑曜石	剝片鐵
	4	凹基三角鐵	2.0	1.5	0.7	1.07	黑曜石	剝片鐵
	5	凹基三角鐵	1.7	1.4	0.3	0.61	黑曜石	剝片鐵
	6	凹基三角鐵	2.0	1.5	0.35	1.63	黑曜石	
	7	凹基三角鐵	1.4	1.3	0.5	0.63	黑曜石	
	8	凹基三角鐵	1.35	1.3	0.55	0.66	黑曜石	
	9	凹基三角鐵	1.7	1.3	0.4	0.90	黑曜石	
	10	平基三角鐵	2.65	2.0	0.7	3.04	黑曜石	
	11	凹基三角鐵	1.75	1.43	0.3	0.40	黑曜石	
	12	凹基三角鐵	1.65	1.5	0.4	0.74	黑曜石	
	13	凹基三角鐵	1.52	1.0	0.45	0.45	黑曜石	
	14	凹基三角鐵	1.7	1.5	0.5	1.08	チャート	
	15	凹基三角鐵	2.5	1.6	0.6	1.51	水晶	
	16	凹基三角鐵	1.4	1.6	0.4	0.76	黑曜石	
	17	凹基三角鐵	2.3	1.6	0.4	1.08	黑曜石	
	18	凹基三角鐵	1.8	1.5	0.45	0.77	黑曜石	
	19	凹基三角鐵	1.8	1.4	0.4	0.71	黑曜石	
	20	凹基三角鐵	2.6	1.55	0.4	0.89	黑曜石	
	21	凹基三角鐵	1.9	1.9	0.3	0.75	黑曜石	
	22	凹基三角鐵	1.4	1.7	0.4	0.81	黑曜石	
	23	凹基三角鐵	1.5	1.1	0.4	0.68	黑曜石	
	24	凹基三角鐵	1.7	1.3	0.4	1.07	黑曜石	

25	凹基三角縁	1.05	1.4	0.3	0.54	黒曜石	
26	凹基三角縁	1.6	1.2	0.4	0.42	黒曜石	
27	凹基三角縁	1.75	0.95	0.5	0.95	黒曜石	
28	小型磨製石斧	3.75	2.3	1.0	11.83	蛇紋岩類	
29	小型磨製石斧	2.9	2.1	0.8	7.16	蛇紋岩類	
30	小型磨石	7.5	4.95	1.4	71.05	粘板岩	
31	小型磨石	3.9	4.0	2.1	45.53	砂岩	
32	小型磨石	4.65	2.9	2.3	39.39	砂岩	
33	小型磨石	1.95	1.7	1.05	4.51	泥岩	
34	小型磨石	3.2	4.05	1.3	23.48	砂岩	
35	スクレイパー	6.3	2.2	0.9	14.8	頁岩	

## 第5章 まとめ

### 第1節 奈良・平安時代

山梨県下の平安時代の土器は甲斐型壺に代表されるような特色を持った土器である。壺のほか甕などの他の器種も甲斐型としての特色を持ったものである。ところで、生活に密着した甕にはそのなかでも地域性があるようである。都留市堀之内原遺跡で検出された胎土に特色ある土器は堀之内原タイプと呼ばれている。提示以後徐々にではあるが、類例が増加し、報告者が当初意識した都留郡型という呼称がより適切な時期に至ったように思える。

甲斐型甕が主流をなし、甕はタタキメのあるものの2破片が出土しているほか、都留型の甕が甲斐型の甕を凌駕する時期が認められる。この甕は時期的に出土に変化が認められる。破片数を山梨県の土器編年に合せて住居址別に提示すると次のようになる。

住居址	時期	甲斐型甕	都留郡型甕	巨摩郡型甕	相模型甕
1号	VII	61	2		
2号	不明	1			
3号	VII	63	1		2
4号	IV	4	44	2	
6号	XII	51	5		

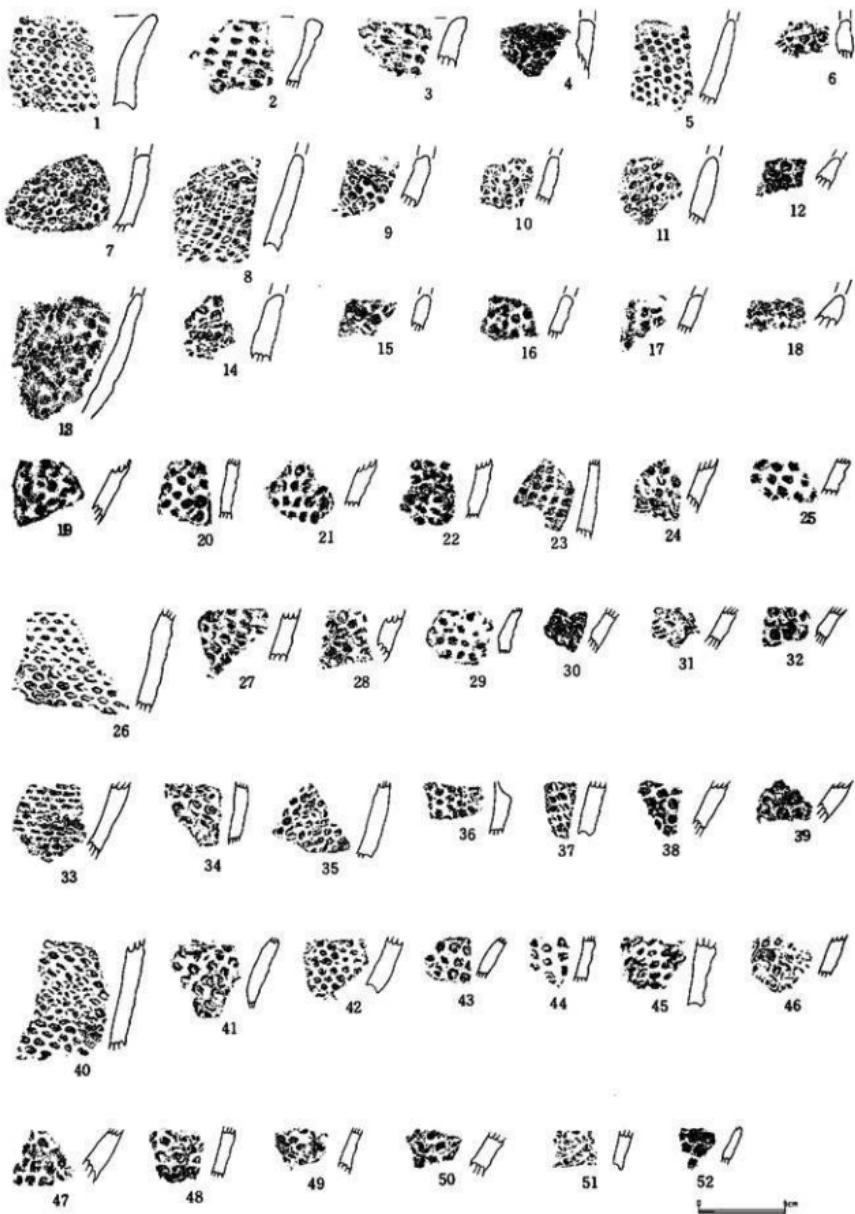
奈良時代に属する4号住居址では、堀之内原タイプの甕が主流をなしている。平安時代に属する1号住は9世紀の中頃、3号住は8世紀の終わり頃から9世紀の初頭に、6号住は10世紀の前半にそれぞれ位置づけられる。3号住居址ではロクロ成形、タタキメを特色とする巨摩郡型の甕の出土が見られ、4号住居址では相模型の甕が見られる。いくつかの系統の甕の出土を見るのも、当遺跡の特色である。

この大月市の西部に位置し、国中地域と接する外ガイド遺跡では日常生活用具である甕は平安時代に入って國中地域と同一化して行く傾向が伺え、これは都内地域一般の傾向であるらしい。

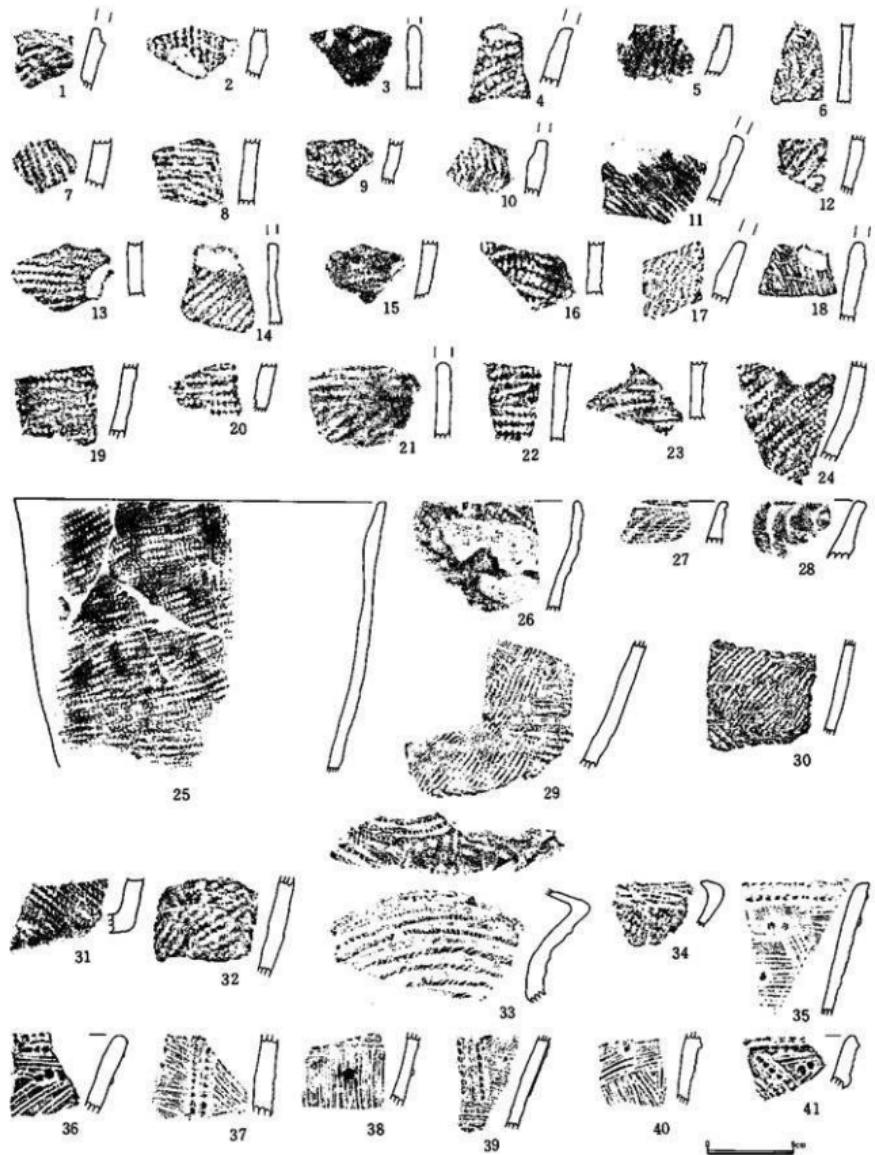
なお、奈良・平安時代の土器の地域性については、甲斐型、相模型などの国名を付すのか適切なものと甕のようにより小地域性を有するものがあり、堀之内原タイプは都留郡型、ロクロ成形、タタキメの甕は巨摩郡型とした方がより地域的展開が理解しやすいように思える。

### 参考文献

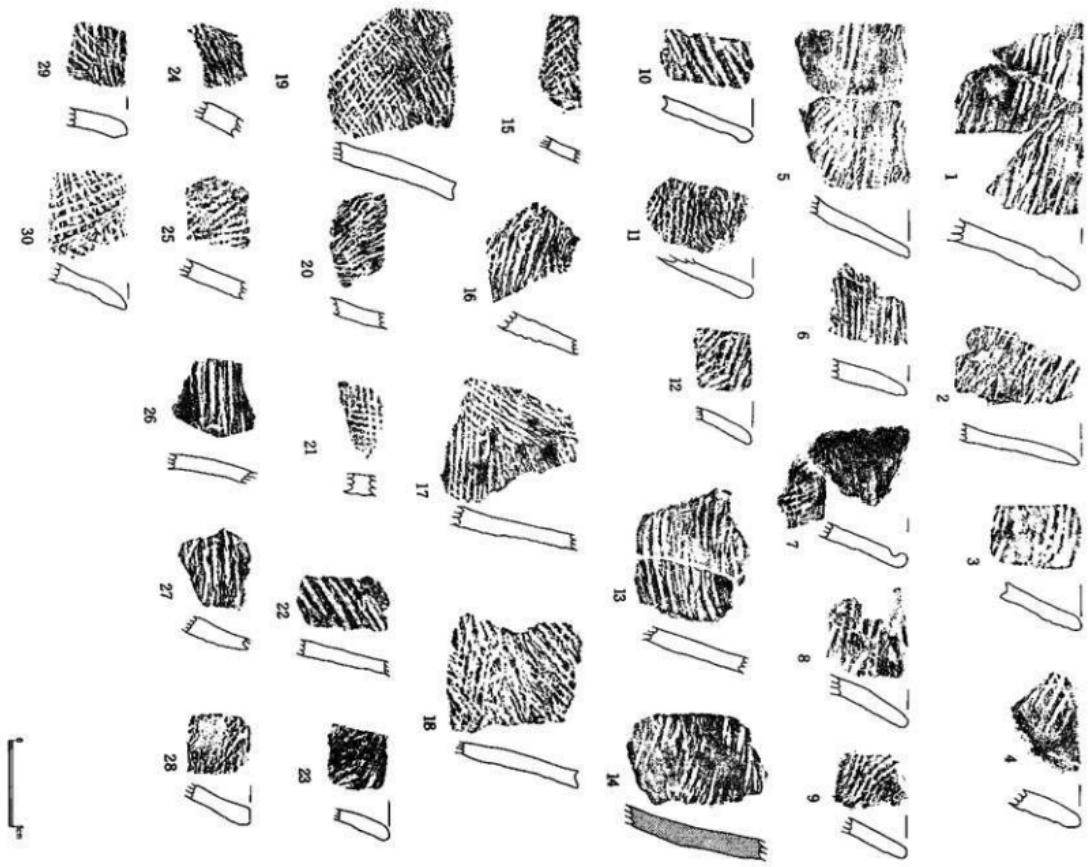
- 保坂康夫 1989 「古代の甲斐型甕をめぐって」『甲斐の成立と地方の展開』雄山閣  
奈良泰史 1980 『堀之内原遺跡発掘調査報告書』都留市教育委員会



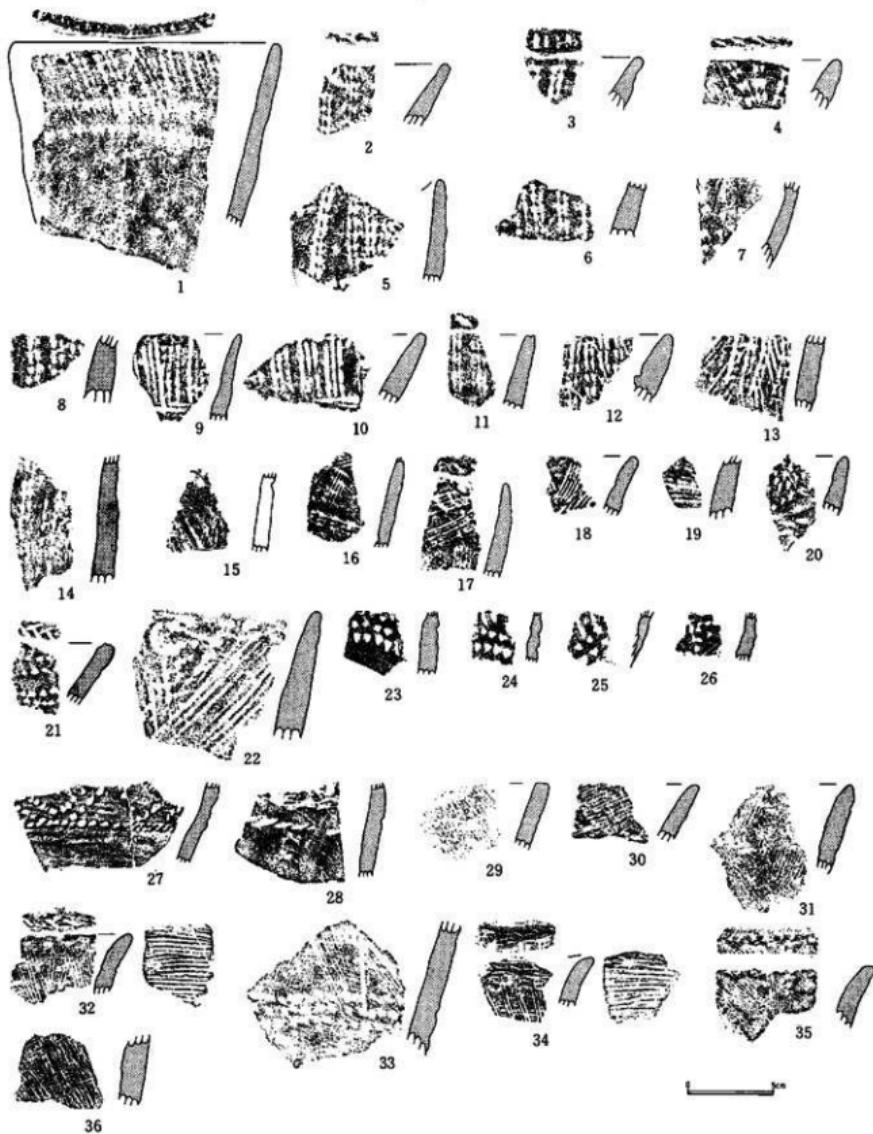
第21図 出土土器拓影(1)( 1 / 3 )



第22図 出土土器拓影(2)(1/3) (25は1/6)

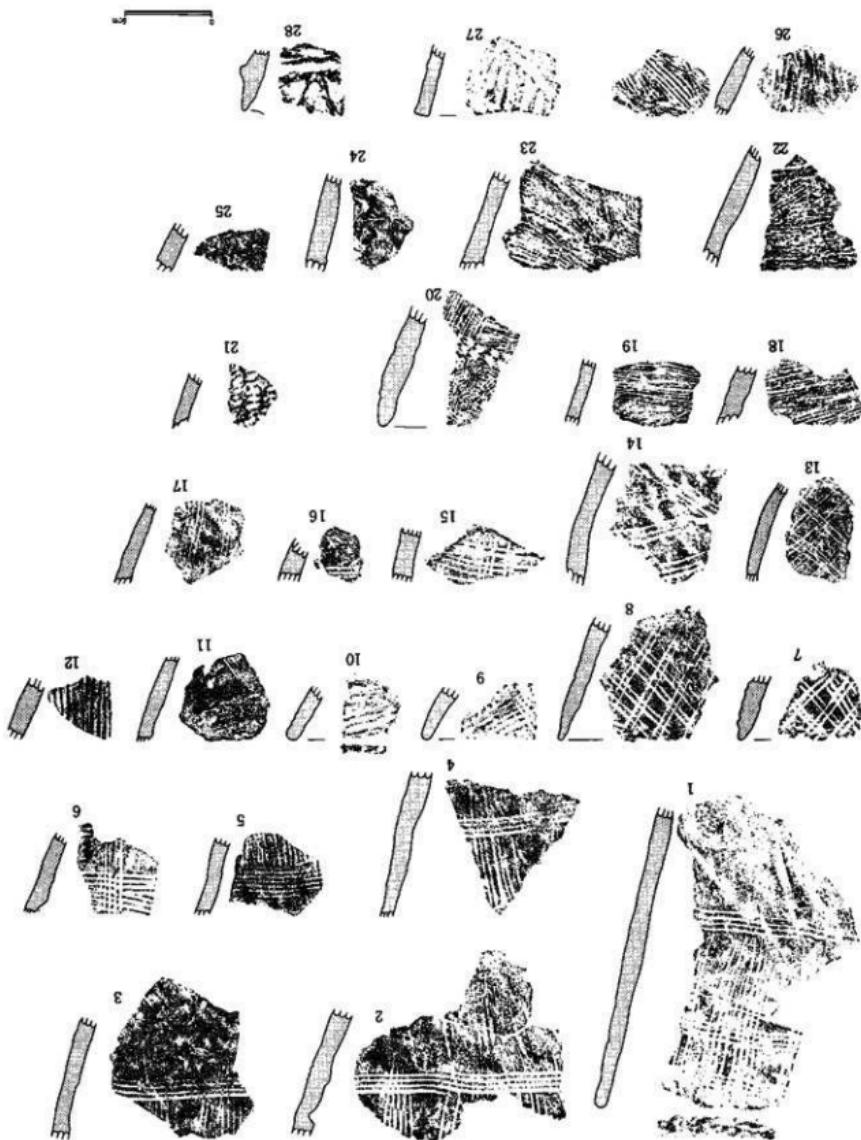


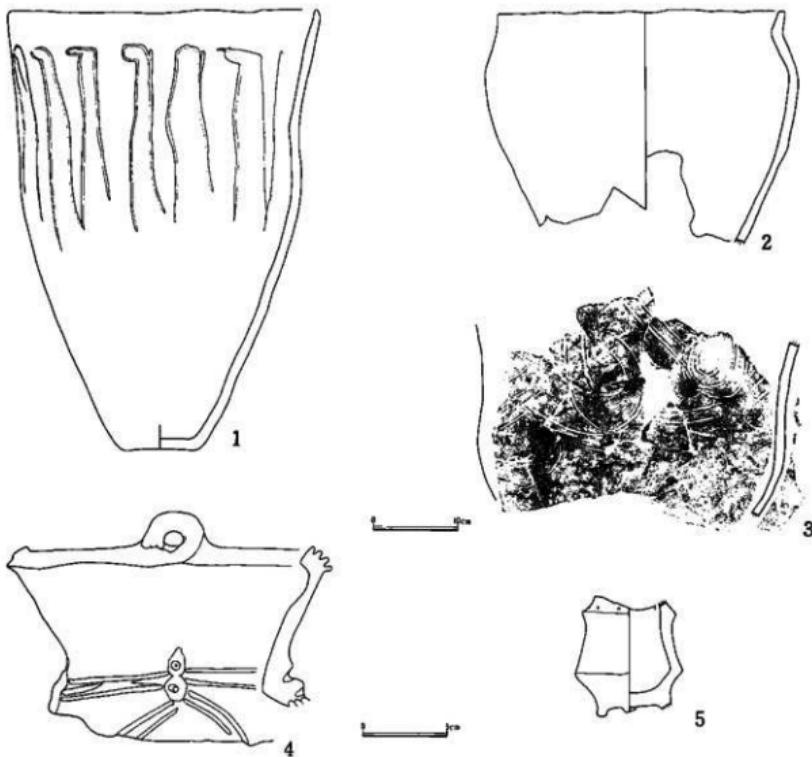
第23圖 出土土器拓影(1 / 3)



第24図 出土土器拓影(4)( 1 / 3 )

第25圖 出土工具形態(5)(1/3)





第26図 出土土器実測図(1~3 1/6)(4、5 1/3)

## 第2節 繩文時代

### 第1項 第1群土器について

外ガイド遺跡の押型文土器破片数52点と極少量にとどまっているが、梢円押型文のみという純粹なかたちで出土している。県内の早期に一時期を画したと思われる押型文土器については集成ななされたのみで、その後良好な遺跡に恵まれずに時間的関係についても不明なのが現状である。

押型文土器の古い部分については、樋沢遺跡、細久保遺跡、立野遺跡の資料を中心にさまざまな論議がなされているが、押型文土器の終末については、なお不明な部分が多いと言える。まず、県内の資料から初頭の部分は、中島宏氏の指摘のとおり、氏のいう樋沢II式土器が大半を占め、樋沢I式土器は見られない。ましてや佐藤達雄氏のいう沢式土器に並行するものは皆無である状況にある。

ここであえて、大略の時間的関係にふれて置きたい。まず上野原町の異方向帯状施文仲大地遺跡例から、三珠町水呑場例が続き、大月市沢中原遺跡、井戸川遺跡の密接重複施文の押型文土器続き、帯状施文の空白部狭くなり、すり消し手法が見られる。都留市尾崎原遺跡があり、次に梢円文の割合が多くなる遺跡が出現してくると思

われる。上野原町穴沢遺跡ではやや長軸の長い小粒の椭円文と田戸上層式に比定される貝殻腹縁文土器の出土があり、当外ガイド遺跡では椭円が丸みをおびてやや大きくなる傾向があるので、後出的な様相である。その後織維を含んだ椭円文の土器、そして上野原町新井遺跡で高山寺式土器の出土があるので、この頃をもって終末と見なしてよいと思われる。外ガイド遺跡では高山寺式土器が見られないこと、田戸上層式土器に比定される土器が見られないことから、後出的ではあるが、最終末の様相ではないと考えられる。

## 第2項 第2群土器について

第2群土器は帰属時期が不明な燃糸文土器群である。外ガイド遺跡4群e類土器に伴う可能性も考えられたが、「吉井1群2類土器」を出土する各地の遺跡ではこの種の燃糸文土器の出土は報じられていない。また、山梨県下の押型文土器出土遺跡においても、燃糸文土器の出土はあるが、第2群土器のような燃糸文土器ではなく、その帰属時期には苦慮していたところである。

埼玉県の金子直行氏の教示によれば、埼玉県橋立岩陰遺跡で吉田格氏が交差する燃糸文土器を押型文土器に伴うものとして報告されており、また第23図1のような口縁部形態及び内面の丁寧な磨きを持つ技法の土器は、しばしば沈線文系土器にみられるものという。そこで、各地の押型文出土遺跡資料を見てみると、ほとんど類例はないが、静岡県富士宮市黒田向林遺跡に燃りの固い燃糸を交差して施文する波状口縁の例が見出せる。また長野県岡谷市福沢遺跡にも類例を見出せる。よってこの第2群の燃糸文土器は外ガイド遺跡の椭円押型文土器に伴うと考えて置きたい。

## 第3項 第4群土器a類とe類1種について

これらの土器群は近年、田中総氏（田中1992）が類型化を試み、「吉井1群2類土器」とした土器である。これは吉井城山貝塚において（岡本1965）、「用途不明の器具で刺突と結節沈線風の文様をつけた土器がある。織維を僅かに含んでいるが、裏面に条痕はない。焼きがよく、雲母末がたくさん認められる。」と分類されたものである。貝層下土層には子母口式、田戸上層式、同下層式、平坂式？、稻荷台式の各型式の土器があり、この時点で岡本氏は貝層直下の茅山上層式、同下層式より古いものとして認識されていたと思われる。

田中氏は吉井城山貝塚資料より、やや幅広く捉えているようであるが、外ガイド遺跡の資料を当てれば、第4群土器a類が相当する。詳細は後日に譲るが、これに同群e類1種および、d類1種を加えることができると思われる。いずれも結節沈線の技法を用いることで共通しており、原資料である吉井城山貝塚より、豊富な内容を示している。

また、長野県男女倉遺跡の土器群は絹条体圧痕文土器との関係でさまざまな論議のある土器で、吉井1群2類土器をも含んでいる。報告者の笹沢浩氏は茅山下層式に、我孫子昭二氏は柏烟から上ノ山式、田中総氏は茅山下層式、金子直行氏は茅山下層式～茅山上層式、中沢道彦氏は柏烟から上ノ山式という見解が表明されている。

「吉井1群2類土器」は吉井城山貝塚の事例から上限は子母口式であり、下限は茅山上層式の間に位置づけられるものと考えられ、さらに突き詰めれば茅山下層式か上層式かのいずれかというところが大方の見解とみられる。

田中氏は鶴ヶ島台式土器からの型式学的変化を述べ、茅山下層式段階に位置づけている。外ガイドの第4群土器b類のように、区画内に刺突文を施すものは、戸田哲也氏の報告した大入遺跡にも見られ、鶴ヶ島台式と近い関係のあるように思え、茅山下層式段階に位置づけられると考える。なお、第4群土器b類、同a類、同e類の間の施文手法の変化を時間的変化と見なすことも可能である。ただe類については類例に乏しく問題はあるので、ここではa類とb類の間の変化を指摘しておきたい。

なお、静岡県沼津市の清水柳北遺跡では、住居址からの出土がはじめて報告され、既設の土器型式では把握されないものと分類され、茅山下層式の新しい部分という関野哲夫氏の見解である。

#### 第4項 第4群土器d類1、2種について

この土器もいまだ型式内容が不明のままである。長野県史でも早期の土器として取り上げ、早期の後半に位置づけられるが細は不明である。小林秀夫氏が長野県茅野市判ノ木山西遺跡で注目し類例を列挙して、田戸上層式以降の条痕文系土器群の中に位置づけている。最近金子直行氏はその一部を氏のいう茅山系土器IV a期すなわち茅山下層式最終末の段階に位置づけられた。氏の時間的位置づけが正しいとすれば、先にあげた「吉井1群2類土器」、外ガイド遺跡の第4群a類土器と東海系の第4群c類土器すなわちハツ崎式土器も茅山下層式の新しい部分に位置づけられるのである。外ガイド遺跡の第4群a類土器は、判ノ木山西類型の土器、東海系のハツ崎式土器といった豊富な土器群と伴うことになる。

ところで、絡条体圧痕文土器の存在が継続的か断続的かの問題はあるにしても、判ノ木山西類型の土器と絡条体圧痕文土器の関係については、なお資料の集積が必要とされる。また、三戸式土器の中に判ノ山西類型の土器と施文方法の類似したものが見られることも時間関係を考察するのに暗示的である。山梨学院大学の調査した奥豊原遺跡の事例では三戸II式、押型文に伴って判ノ木山西類型の土器の出土がある。

判ノ山西類型の土器はさらに織維の有無、裏面条痕の有無、口縁部文様帶区画列点の有無、さらには細かな施文具の細別によって分析されなければならない。因みに県内の判ノ木山西類型の土器出土遺跡は牧丘町奥豊原遺跡、大月市岩殿中倉遺跡がある。岩殿遺跡では田戸上層式に比定される土器の出土もある。ただし、上野原町穴沢遺跡では田戸上層式に比定される土器があるのに、判ノ山西類型の土器の出土は報じられていない。

#### 第5項 第4群土器c類について（絡条体圧痕文土器）

絡条体圧痕文土器即子母口式土器ではないことはないことは、多くの先学によって論証されてきたが、絡条体圧痕文が地域によってどのくらい幅があるかは、多くの論議がされているところである。外ガイド遺跡では非常に僅かではあるが絡条体圧痕文土器が2片出土している。県下の絡条体圧痕文土器はすでに浅利司氏（浅利1992）が指摘したように、空白地帯のような様相を呈している。現在、小瀬沢町中込遺跡、西桂町寺野遺跡、富士吉田市古屋敷、大月市外ガイド遺跡、上野原町穴沢遺跡、牧丘町奥豊原遺跡、韮崎市中尾根遺跡の6遺跡に過ぎない。隣接する長野県とは大きな違いである。したがって絡条体圧痕文土器に関する論考は浅利氏のものを除いてない。

そこで外ガイド遺跡の絡条体圧痕文土器の位置づけを考えれば、先に説明の折りに指摘したように、絡条体圧痕文土器が当遺跡の「吉井1群2類土器」に近似するのである。これは型式学的に口辺部文様帶を区画する刺突文が類似する。ただし、このc類土器は横に刺突するが、a類土器のような「吉井城山1群2類土器」は縦に刺突することが多い。絡条体圧痕文文様が口辺部区画帯に絡条体圧痕文を施文するのに対して、押引文を施文するかの違いであり、両者は同時期の所産と考える。施文具の置換については、言うまでもなく先学によって再三述べられているところである。

長野県下の最近の研究成果では男女倉遺跡の絡条体圧痕文土器が東海地方の柏畠式の段階から、梨久保遺跡の燃糸文地文の絡条体圧痕文土器が前期に及ぶ可能性の指摘があり、塩屋式の段階まで存続したとされる。遺跡数の少ない山梨県では富士吉田市古屋敷遺跡の絡条体圧痕文土器が野島式期に位置づけられている。そして中込遺跡の絡条体圧痕文土器が打越式段階に位置づけられる。地理的な関係もあるが駿河堂遺跡群の神之木台式の古手の天神山式段階には絡条体圧痕文土器は伴わないので、東部地域では天神山式期には絡条体圧痕文土器は終息を迎え、長野県に近い中込遺跡では続いていると考えられる。現状では県内に子母口式の資料は忍野村忍草遺跡にあるのみで、実態は不明な状況にあり、上限は古屋敷の野島式段階に、下限は打越式段階の中込遺跡が位置づけられる。

外ガイド遺跡の絡条体圧痕文土器は先述したように文様構成から第4群土器と類似し、施文具が絡条体で押圧文を施すか丸棒及び竹管状の工具で押引文を施すかの違により、施文具の置換を意識したものと思われる。

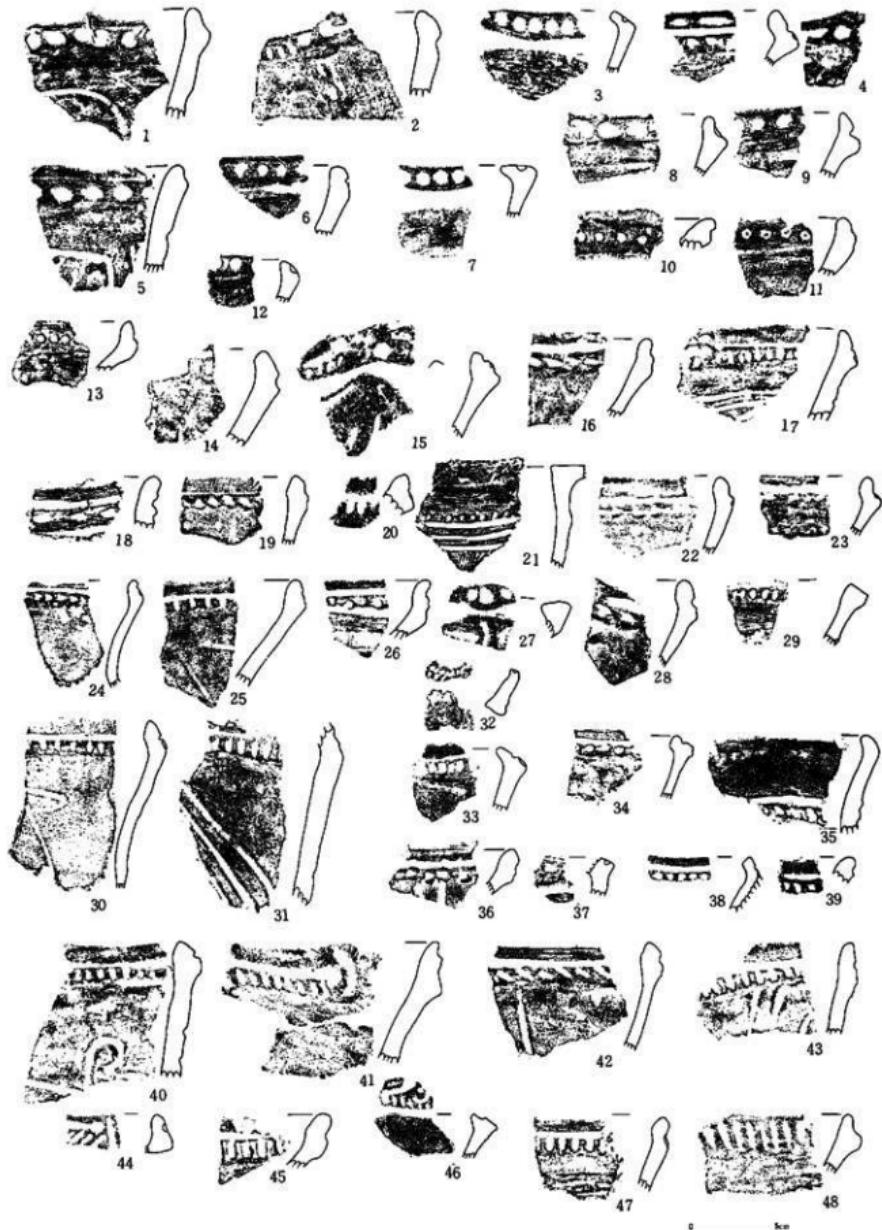
よって、この絡条体圧痕文土器は外ガイド第4群e類などの「吉井1群2類土器」に伴うものとして、茅山下層式の新しい部分に位置するものとして置きたい。

## 第6項 遺構の所属時期について

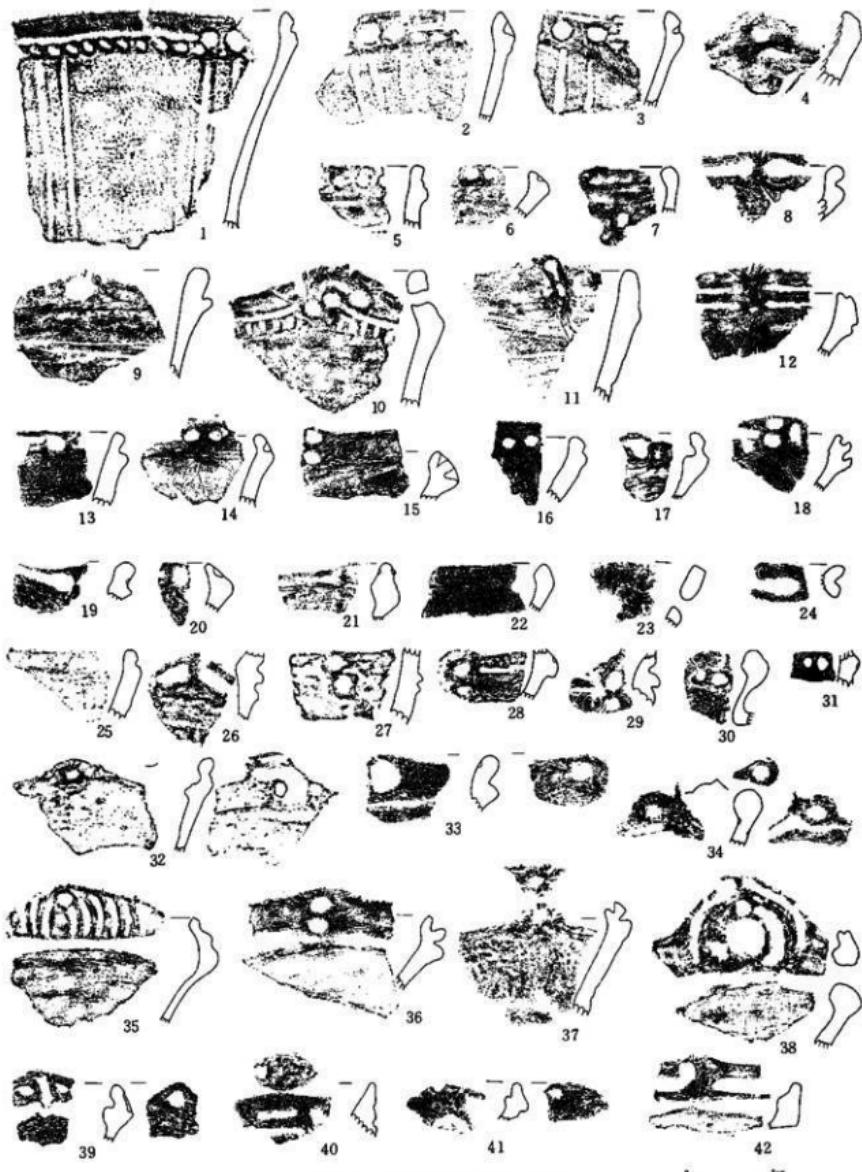
外ガイド遺跡の縄文時代の遺構については南側（山側）の堆積の厚い地域では早期と後期の区分が容易で、それにしたがって後期と早期の遺構については所属時期を記述した。早期とした石組遺構は発掘時点では押型文土器が顕著であったので、すべて押型文土器に伴うものという判断であったが、整理を進めてゆくにしたがって、第38図と39図に示したように「吉井1群2類土器」とそれに伴出する時期の出土量が多く、押型文土器に伴う遺構と「吉井1群2類土器」に伴う遺構との明確な区分は不可能であることが明白となった。小土坑に礫を集石したSJ010やSJ017のような遺構は押型文期から見られ、各地の状況を見ると、茅山下層式段階にあっても問題はないのである。またSJ080のような集石は、遺構面からは後期と早期の土器が出土しており、早期から後期の範囲にある訳であるが、中谷遺跡の同様な遺構のC<sup>14</sup>年代測定では中期初頭の年代が与えられている。

## 参考文献

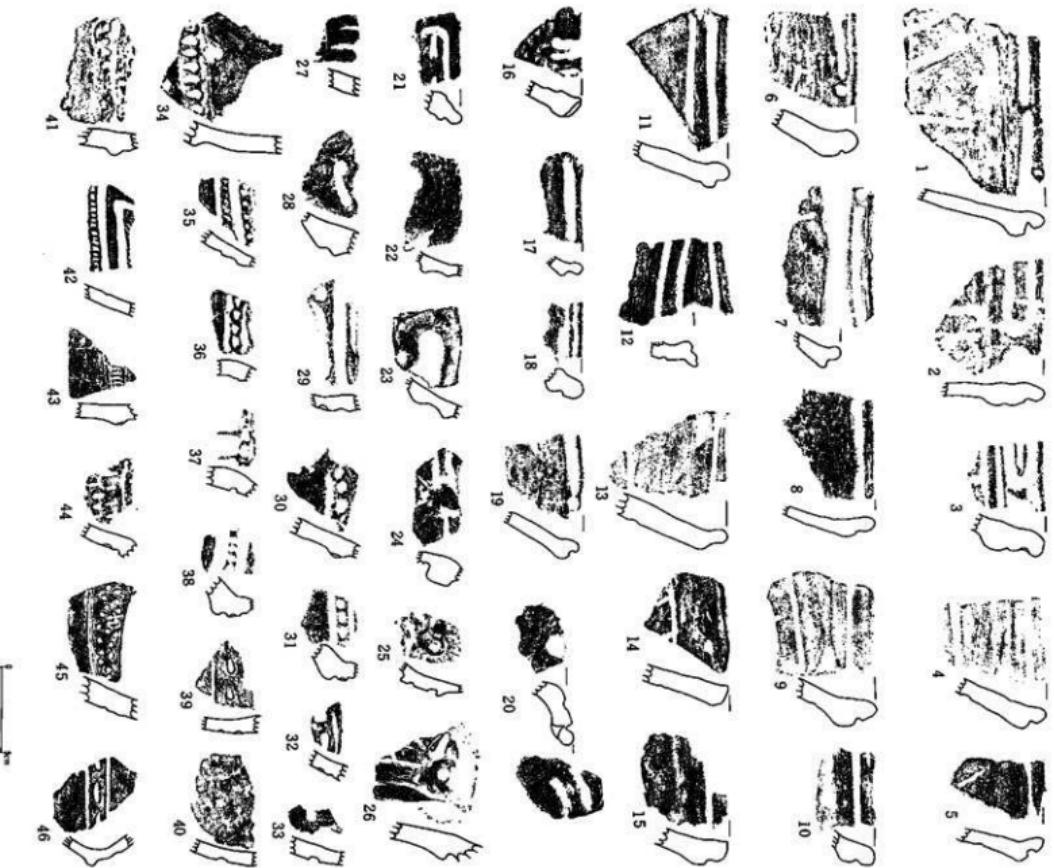
- 田中 総 1994 「中部高地周辺における縄文早期後半土器群の一様相」『中部高地の考古学』Ⅳ 長野県考古学会  
金子直行 1991 「茅山上層式土器の再検討」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財事業団  
関野哲夫ほか 1989 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会  
関野哲夫 1985 「茅山下層式土器について」『古代』80  
岡本 勇 1962 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(一)」横須賀市博物館研究報告 6  
小林秀夫 1981 「判の木山西遺跡」長野県中央道茅野市・原村その3  
燃糸文土器については、埼玉県の金子直行氏のご教示による。  
牧丘町奥豊原遺跡については、山梨学院大学十箇駿武先生のご教示による。



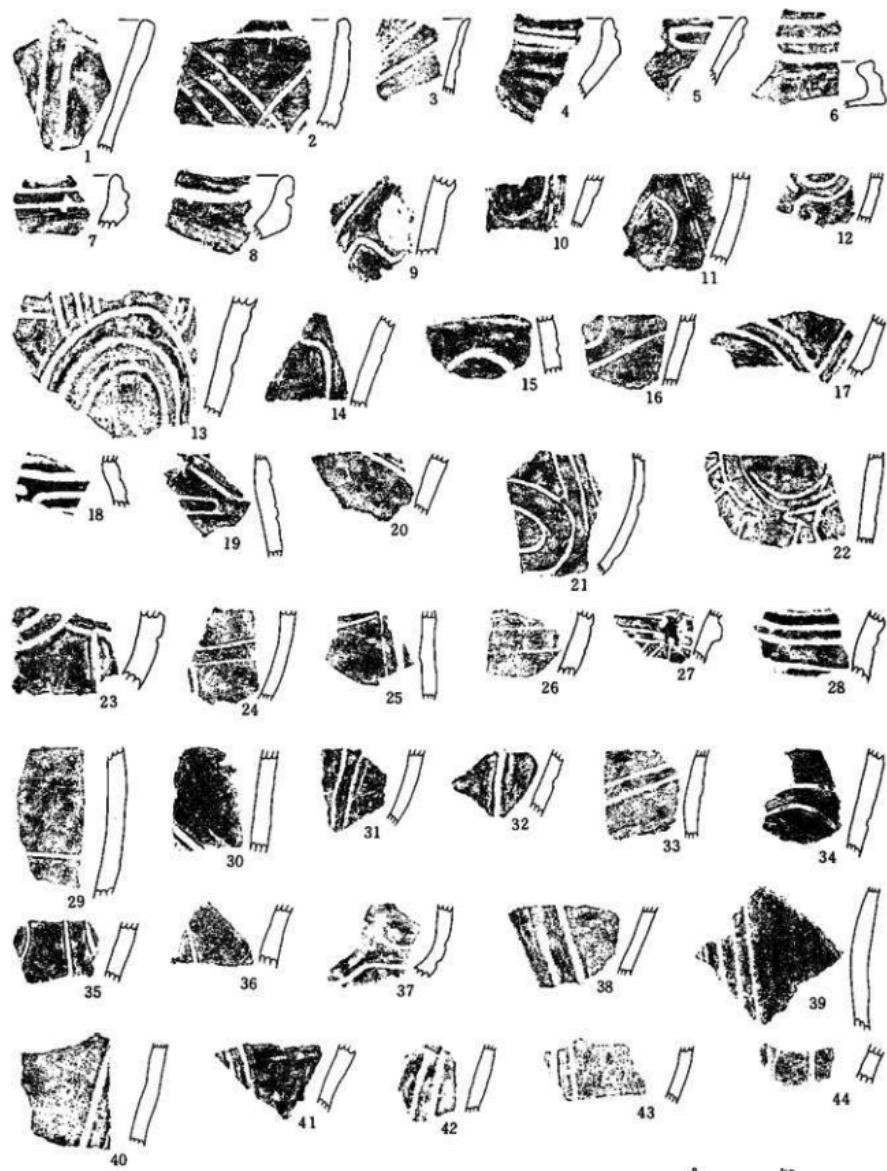
第27図 出土土器拓影(6)(1 / 3)



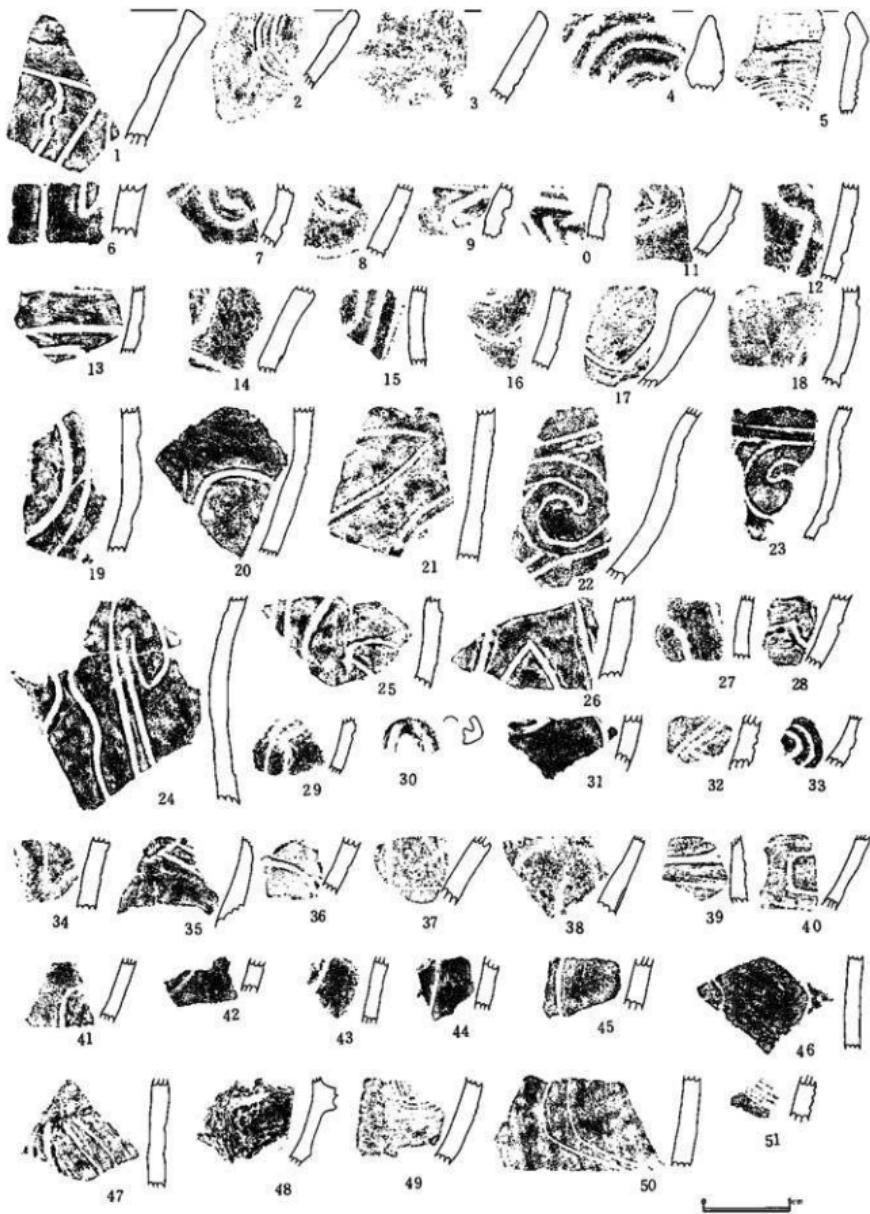
第28図 出土土器拓影(?) (1 / 3)



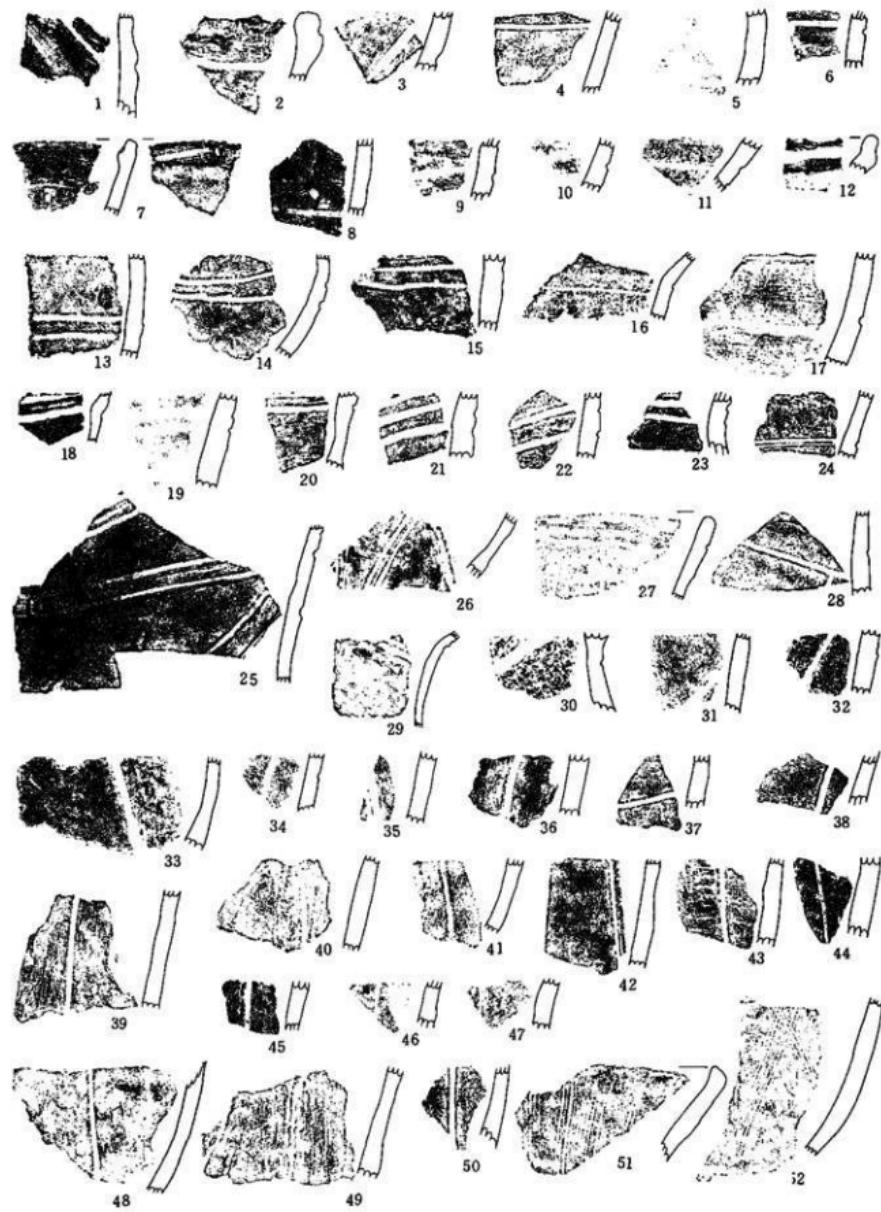
第29圖 出土土器拓影(1 / 3)



第30図 出土土器拓影(9)(1 / 3)

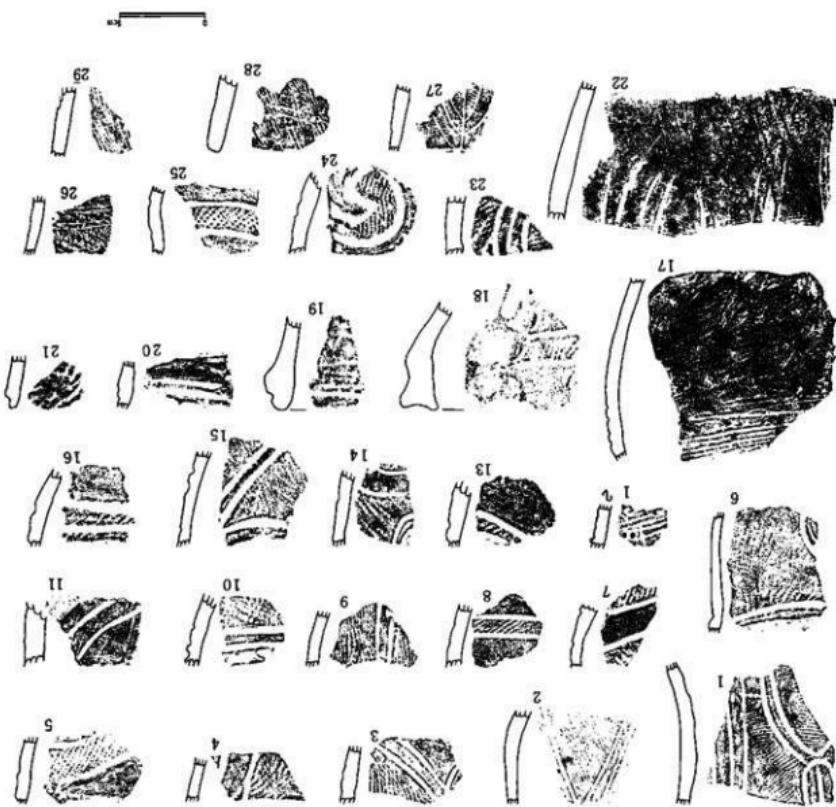


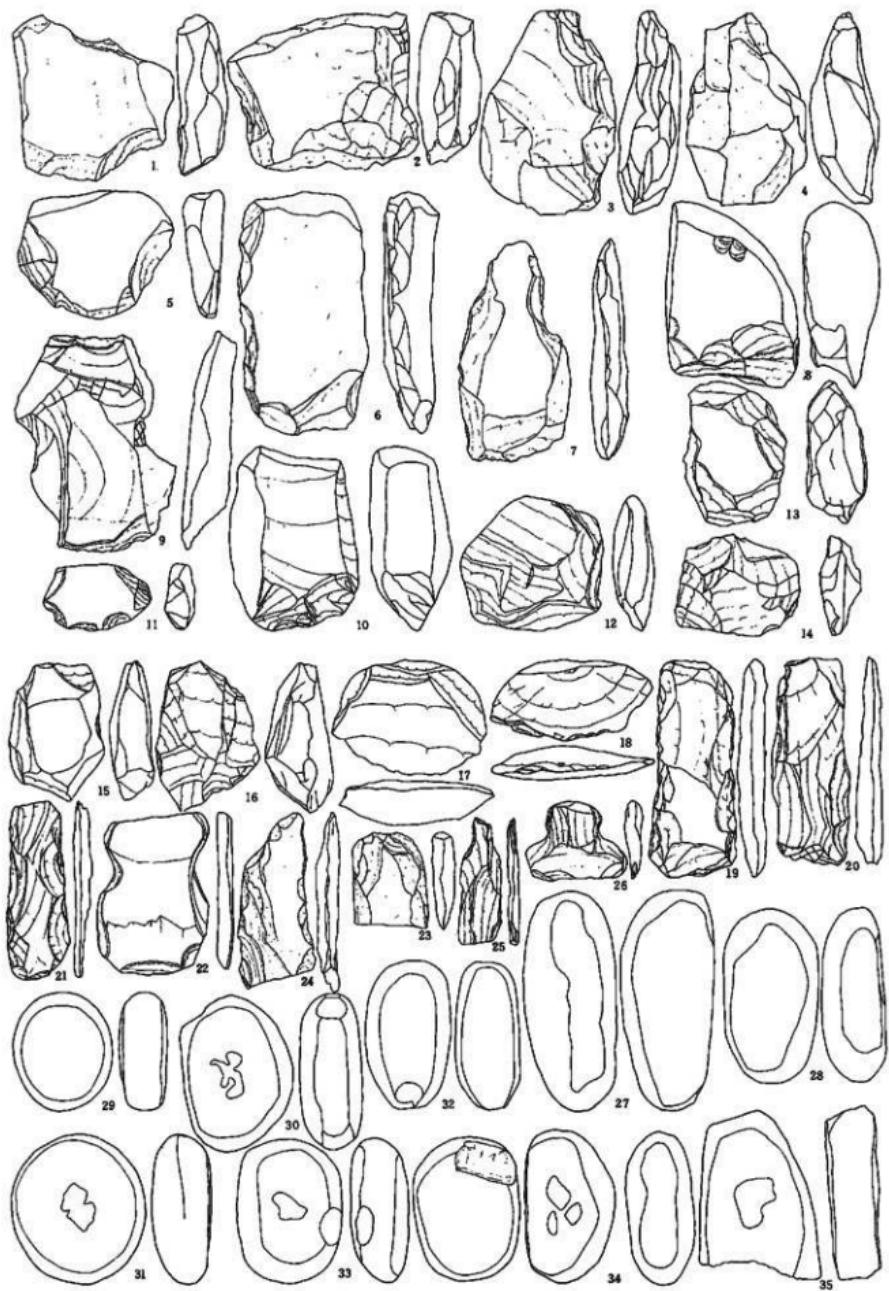
第31図 出土土器拓影00(1 / 3)



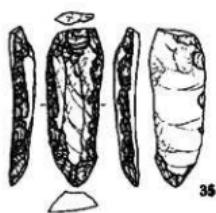
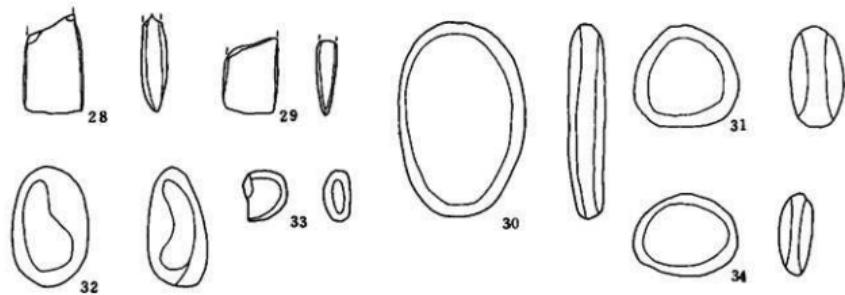
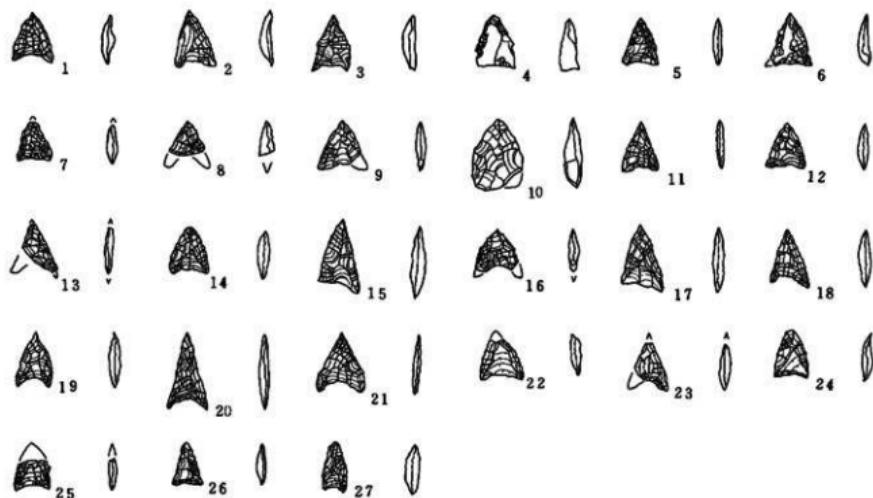
第32図 出土土器拓影①(1/3)

第33图 出土土器拓影(1/3)





第34図 出土石器(1)(1 / 3)



0 5cm

第35図 出土石器(2)(1 / 3)

## 第6章 外ガイド遺跡のテフラ

### 1.はじめに

本遺跡は、笛子川右岸で高川山の西北に位置する。遺跡周辺の地質は、第三紀の中期中新世の淡青緑色の猿石英安山岩質火山疊層灰岩層が分布し、これに高川山とその西方の大岩の安山岩が貫入している。また本遺跡は、富士火山の北北東約28.5kmに位置し、遺跡内には褐色ローム層とそれをおおう黒色土が堆積していて、富士火山起源のスコリア層が3枚肉眼で認められる。そのうち下位のスコリアは、丸みのあるやや発泡不良の黒色スコリア・褐色スコリアからなるやや粗粒なテフラで、富士黒土層中に最大5cmの薄いレンズ状堆積を示し、連続性に乏しい。中位のスコリアは、黒色スコリアを主体とし赤色スコリアを伴う新鮮なテフラで、厚さ10~14cmをもち富士黒土層の直上に位置し、連続的に追跡が可能な鍵層である。上位のスコリアは、発泡不良の黒色スコリアのほかに表面が風化した褐色スコリアを多く含み、厚さ6cmのレンズとして挟在するが、連続性に乏しい。今回は縄文時代早期押型文土器包含層をおおう富士黒土層を対象に広域テフラによる層位の確認を目的としてテフラ分析を行ったので、以下に報告する。

### 2. 試料・分析法

試料は、調査区中央の縄文早期遺構調査トレンチ北壁土層断面の富士黒土層から採取されたNos. 1~12である。土層断面の鉛直方向に連続して高さ5cm幅10cm奥行5cmの直方体部分から試料を採取した。富士黒土層は、上部のNos. 1~5付近でやや明るく、下部のNos. 6~12でやや暗い傾向がある。

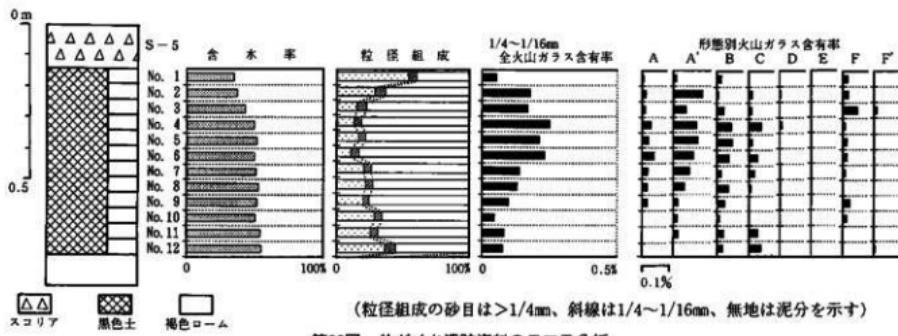
試料は、濡ったまま約20gを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析筒 (#250) で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析筒 (#60, #250) を用いて>1/4mmおよび1/4~1/16mmの粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析に用いた試料の乾燥重量は、別に同一試料約5~10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105°C、5時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4~1/16mmの粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顯微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が1000粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木(1980)の方法に従い、細粒結晶を包有するF型をF'型とした。なおスコリア質火山ガラスはその他に含めた。屈折率は新井(1972)の方法で測定した。

第3表 外ガイド遺跡試料中の計数火山ガラス粒数 (+は計数以外の検出を示す)

試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12
A 無色	1	2	2	6	5	8	4	4	5	1	1	
A 褐色												
A' 無色	2	14	7	15	17	13	11	8	4	3	4	
A' 褐色					1		+					
B 無色	3	1	4	10	10	8	3	8	6	2	5	3
B 褐色						1						
C 無色		2	2	9	3	6	4	2			3	3
C 褐色											4	
C 緑褐色												3
D 無色		1		2			1		1			
E 無色							1					
F 無色	3	3	8	2	3	2	2	1	6	3		
F 褐色							1					
F 緑褐色				2	1	1		1				1
F' 無色												
F' 褐色												
F' 緑褐色												
その他	991	977	975	954	960	960	975	976	978	991	983	990
合計	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

第4表 火山ガラスの屈折率

試料番号	火山ガラスの屈折	色調	屈折率(主要レンジ)	対比されるテフラ
No.6	バブルウォール型(A・A')型	無~緑褐色	1.508~1.516(1.508~1.512)	鬼界アカホヤ(K-Ah)



(粒径組成の砂目は>1/4mm、斜線は1/4~1/16mm、無地は泥分を示す)

第36図 外ガイド遺跡資料のテフラ分析

### 3. 分析結果

偏光顕微鏡下での計数結果を第3表に示す。これをもとに水分含有率、粒径組成、1/4~1/16mm全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第36図に示す。なお1/4~1/16mm全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量あたりの1/4~1/16mm粒径の火山ガラスの割合で表示した(注1)。屈折率測定値を第4表に示す。以下に特徴について述べる。

水分含有量はNos. 4~12ではほとんど変化がないが、上部のNos. 1~3では上方に漸減する。粒径組成では、1/4~1/16mm粒径砂分の割合はほとんど変化しない。しかし>1/4mmの粒径砂分は、No. 12から上方に漸減し、Nos. 4~6付近を極小としてNos. 1, 2で急増する。Nos. 1, 2では粒径約1~8mmスコリア粒子が多く含有される。これらスコリア粒子の存在は、黒色土層直上の中位スコリア層からの拡散によるものと考えられる。

1/4~1/16mm全火山ガラス含有量は、全体に少ない。下部のNo. 12から上方に漸増傾向を示し、No. 4とNo. 6で極大に達し、上方に減少する。1/4~1/16mm全火山ガラス含有量が極大を示すNos. 4~6付近において火山ガラスを形態別に見ると、A・A'・B・C型の極大が集中する。特にA'型が多く、A・B・C型がこれにつづく。B・C・F型などが断続的にわずかずつ検出されるのに対し、A'型はNo. 5を、A型はNo. 6を極大とするなめらかな曲線を描いて検出される。またNos. 5~3において無色A'型に混じって淡褐色を呈する薄手のやや大きいA'型火山ガラスが認められる。No. 6におけるA'型火山ガラスの屈折率は、1.508~1.516主要レンジ1.508~1.512を示す。以上からこれらA・A'型火山ガラスは、富士黒土層中のバブルウォール型火山ガラスの濃集層層(たとえば町田ほか、1978；上杉ほか、1980)に対比され、約6300年前の鬼界アカホヤ火山灰K-Ah(町田ほか、1978)に同定される。本遺跡での縄文早期押型文土器包含層とK-Ahとの層位関係は調和的である。

K-Ahとの層位関係やスコリアの岩相的特徴から、富士黒土層を覆う中位のスコリア層はS-5(赤色スコリアI)に対比される。富士黒色土層中の下位のスコリアはS-1~4に、縄文後期包含層に覆われる上位のスコリア層はS-6(赤色スコリアII)に対比される可能性がある。上杉(1990)によるとS-5~6は縄文時代中期後半のテフラである。

(帝京大学山梨文化財研究所 河西 学)

注1 形態x型の火山ガラスの含有率Axは、 $Ax(\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$ で算出される。ただし、B: 試料の乾燥重量(g)、C: 1/4~1/16mm粒径砂分の重量(g)、D: 計数した1/4~1/16mm粒径粒子の総数、Ex: 計数したx型火山ガラスの粒数

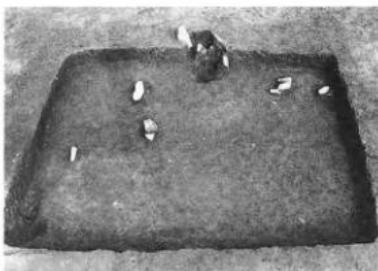
### 文 献

- 遠藤邦彦・鈴木正章(1980)立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、19~30。  
町田洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰。第四紀研究、17、143~163。  
上杉陽(1990)富士火山東方地域のテフラ標準柱状図ーその1:S-25~Y-114ー。関東の四紀、16、3~28。  
上杉陽・米沢宏・開原志寿恵・中村仁子・重藤伸子・岩井都乃(1980)富士山東縁地域の古期富士テフラ累層。『自然と文化』、3、33~46、平塚市博物館。

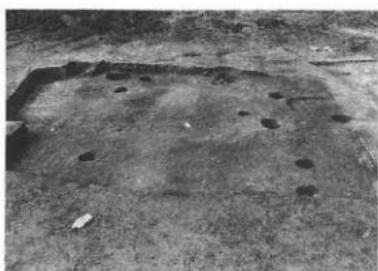
# 図版



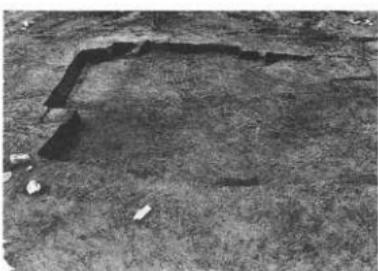
SB001



SB003



SB003・004



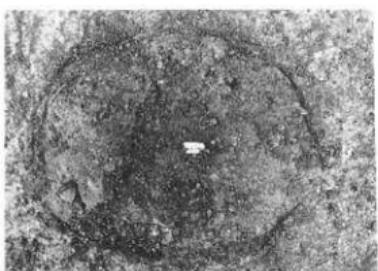
SB003・004



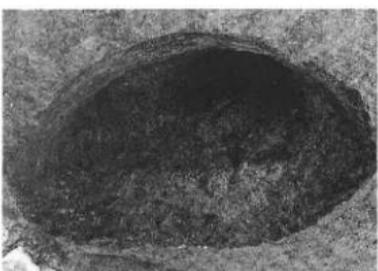
SB006



SP010



SP009



SP011



SJ001



SJ006



SJ003



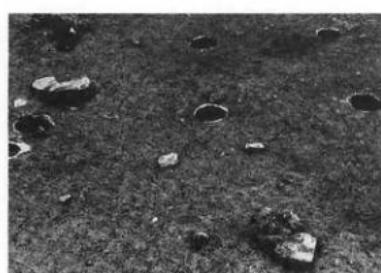
SJ008



SJ008



SJ009



SJ009



SJ010



SJ013



SJ013



SJ014



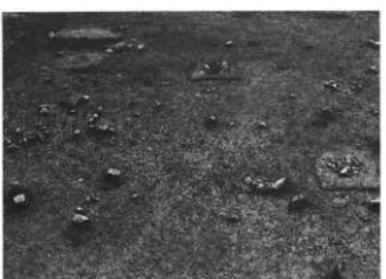
SJ015



SJ016



SJ017



SJ017付近



SJ018



SJ019



SJ020



SJ020ほか



SJ019・020



SJ021



SJ022



SJ023



SJ024



SH001



SX002



SX003



SX004



SX006



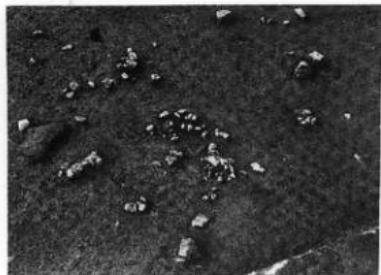
SX006



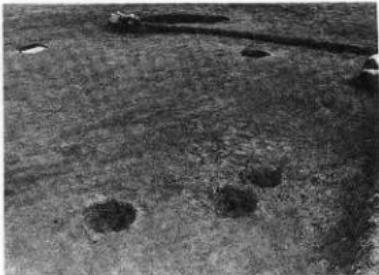
SX005



SX007



SX008



SX010



SB005



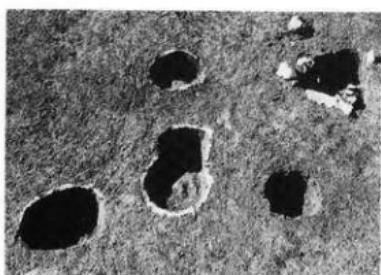
SB005附近



SH004



SP003

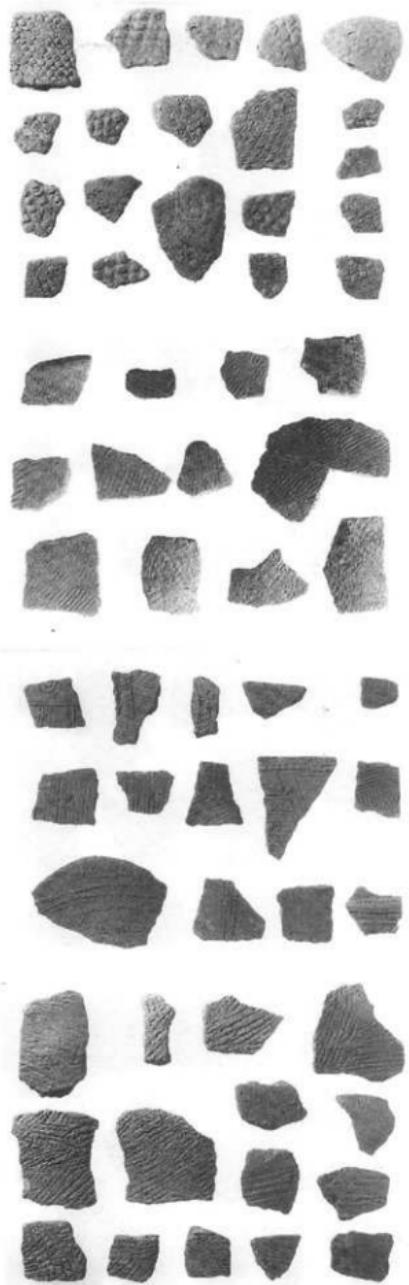


SP003附近

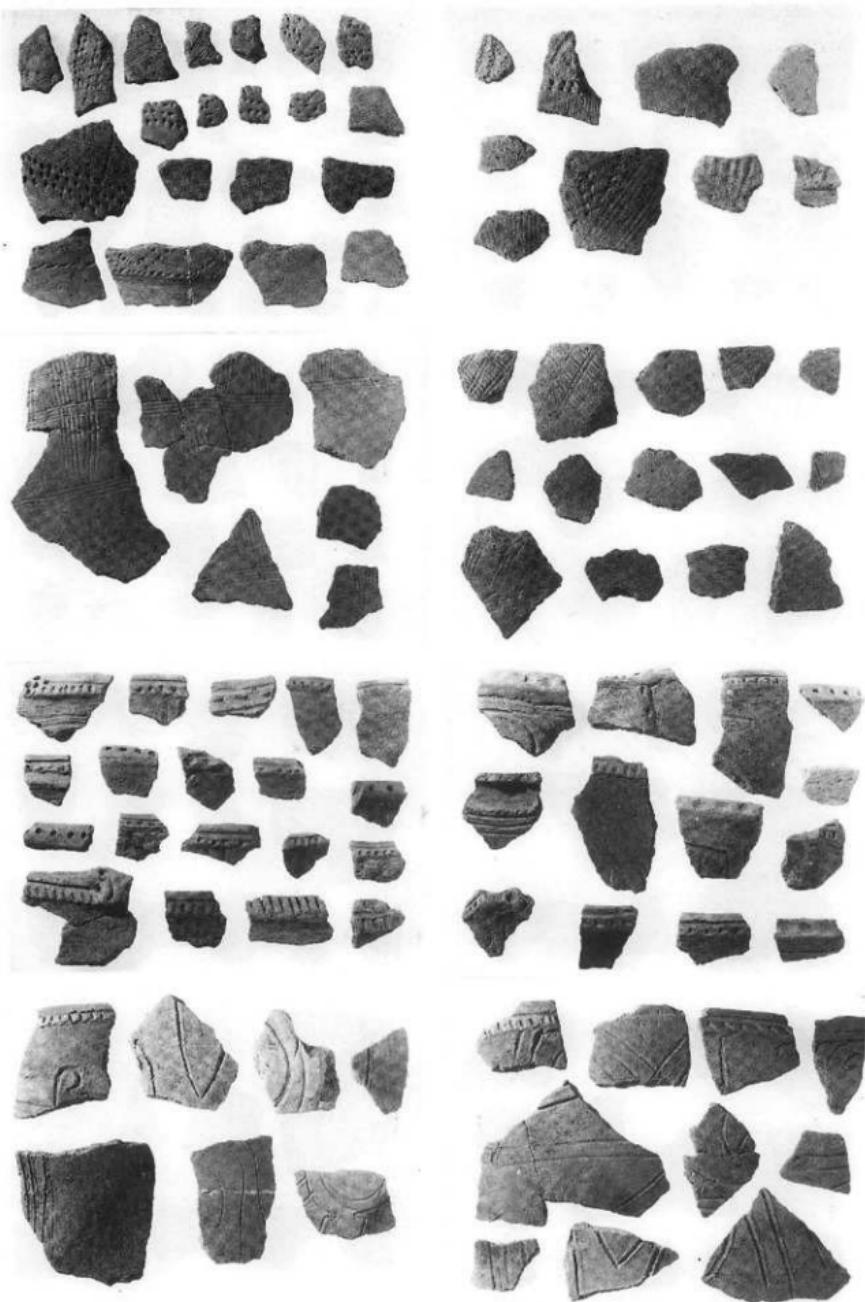


SS003

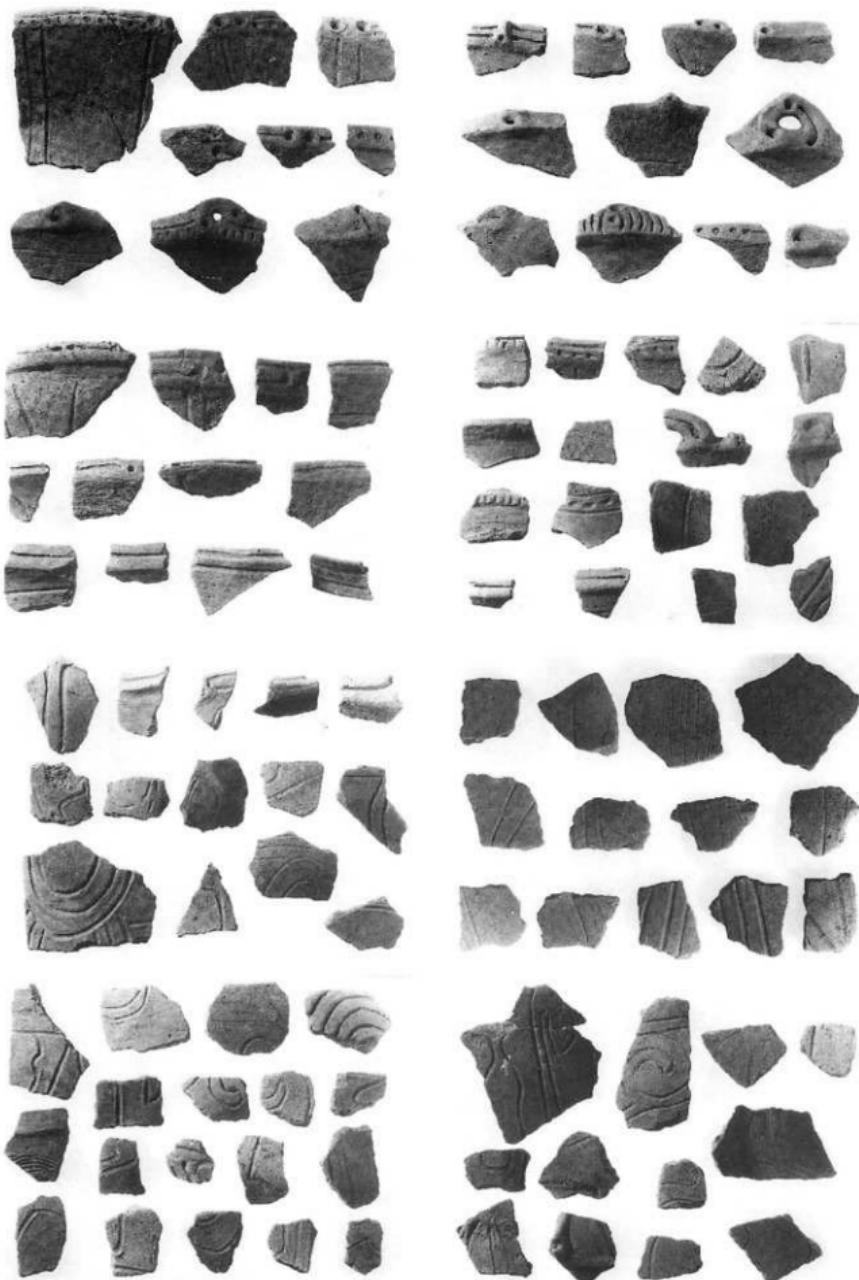
図版 7 繩文早期の土器

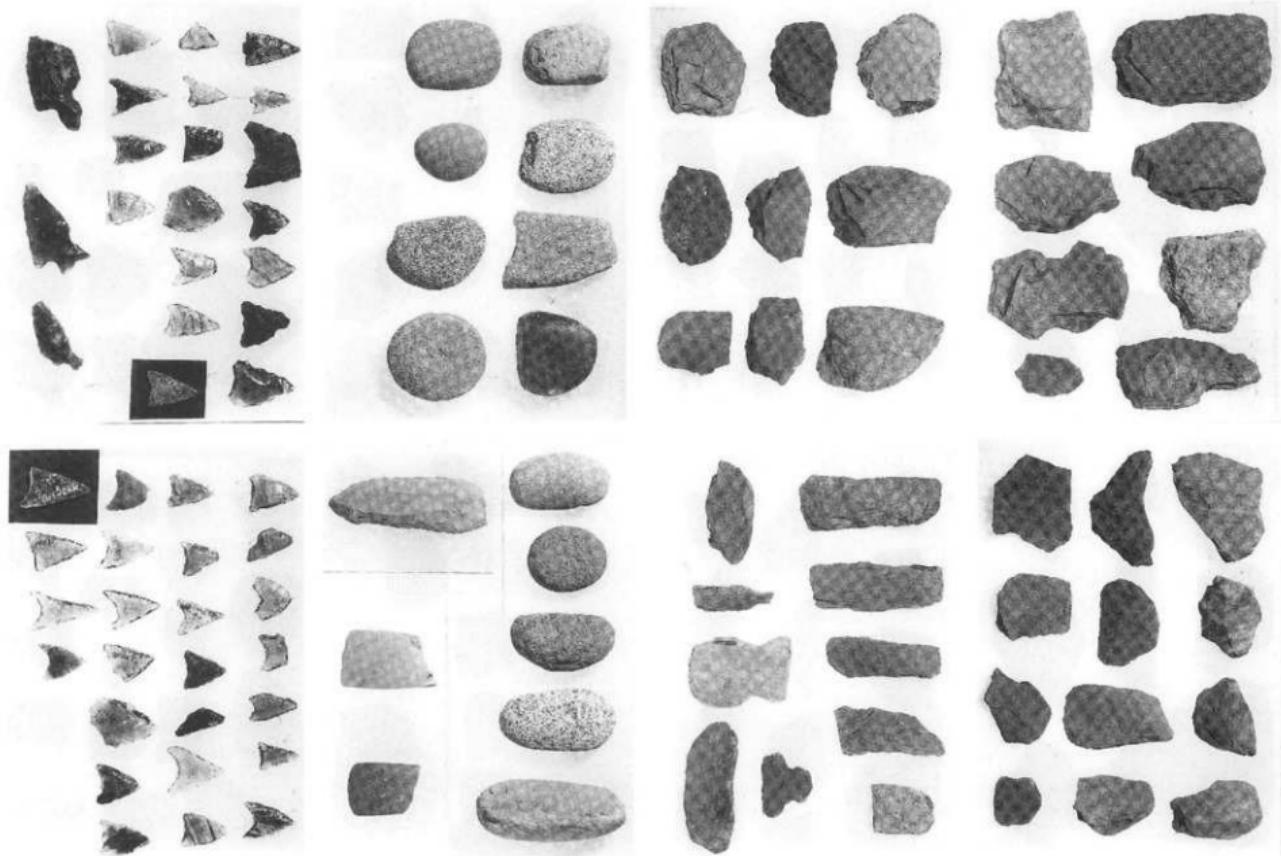


図版 8 楽文早期・後期の土器



図版9 繩文後期の土器





## 報告書概要

ふりがな	そとがいどいせき					
書名	外ガイド遺跡					
副書名	山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査					
シリーズ名・集	山梨県埋蔵文化財センター					
シリーズ番号	第117集					
著者氏名	小野正文・河西学					
発行者	山梨県教育委員会					
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター					
所在地	山梨県東八代郡中道町下曾根923 郵便番号400-15 電話0552-66-3881					
発行年月日	1996(平成8)年3月30日					
ふりがな	ふりがな	コード市町村	遺跡番号	北緯	東經	調査面積
所収遺跡名	所在地	19206		35°33'16"	130°53'20"	2200
そとがいどいせき						山梨リニア実験線 建設工事
外ガイド遺跡	山梨県 おおつきしはつかり 大月市初狩					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査期間	
外ガイド遺跡	集落址	奈良・平安時代	住居址5	墨書き器・甕	1991.10.から12	
		縄文時代	土坑4 敷石住居址1 掘建柱建物址1 堅穴住居址2 屋外炉24	後期埋甕 押型文土器 沈線文土器 絶条体压痕文土器		

## 外ガイド遺跡発掘調査報告書

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第117集

山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査

印刷日 1996年3月25日

発行日 1996年3月30日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷所 株式会社少国民社

